

先生方とともに
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉
高校版
2017
Volume 3

8月

VIEW21

資質・能力と 学びをつなぐ

特集

「学校教育デザイン」を描く②

これからの
教育課程・教育活動計画
のあり方

主体的・対話的で深い学びへ
実践 アクティブ・ラーニング

世界史

静岡県立掛川西高校 吉川牧人

生物

熊本県立熊本北高校 溝上広樹

指導変革の軌跡

東京都立小平西高校

鹿児島県立川内高校

外に一步踏み出して

生徒 この学校では、グループで話し合って発表する機会が多いので、まずはみんなで相談しようという意識がすごくあります。

生徒 先生に質問をすると、考えるためのヒントをくれますよね。その時は「答えを教えてよ！」って思うけれど、おかげで疑問が出てきても、まずは自分で考える癖がつかしました。

先生 みんなの豊かな発想を引き出すためには、先生は何も言わない方がいいからね。先日の島根県立隠岐^{おき}島前^{じょうぜん}高校との遠隔授業でも、たくさんアイデアが出て、みんなの表情が生き生きしていたよ。

生徒 お互いの地元を案内する旅行計画を考えて発表し合いましたが、それぞれの地域独特の名所や名物、方言などがあって、驚きの連続でした。楽しくて2時間があっという間でした。

先生 隠岐の生徒の意見も聞きながら、自分たちで調べて話し合っ、1泊2日のプランを完成させたよね。発表の時は寸劇も交えてプランの楽しさをうまく伝えることができ、隠岐の生徒もとても喜んでいたね。

生徒 私は、隠岐のみんなに刺激をもらい、他校生と

もっと話したいと思うようになりました。JICAの体験プログラムにも参加したいのですが、校内の競争率が高そうなので、先生、私を推薦してください。お願いします！

先生 その意気込みは素晴らしい！外に出て、いろいろな人と出会うことで、次の新しい何かにつながり、成長できる。先生も校外の研修に参加したり、みんなの引率で全国大会に行ったりして、校外の知り合いが増え、その縁で今回の遠隔授業も実現したんだよ。

生徒 私は、校内発表会で、先輩が校外で活躍しているのを知って、自分も力をつけたいと思いました。

先生 みんなが活躍できるように様々な体験の機会を用意してきたけれど、先輩たちの積極的な姿勢が自然と後輩に引き継がれていてうれしいよ。

生徒 これから本格的に取り組む地元の温泉街を活性化させる地域探究活動でも、えびの市を訪れる観光客が増えるよう、みんなで協力していろいろなアイデアを出していきたいです。

先生 先生もこの町の出身だから、みんなの手で町が活気づいていくのは楽しみだな。期待しているよ！

梅北瑞輝先生 教職歴16年。同校に赴任して10年目。進路指導主事。キャリア教育推進リーダー。

宮崎県立飯野高校 全日制／普通科・生活文化科／共学／1学年約120人／2017年度進路実績（現役のみ）国公立大は、山口大、宮崎大などに5人が合格。私立大は、宮崎国際大などに延べ18人が合格。短大、専門学校進学26人。就職19人。

2 特集

「学校教育デザイン」を描く②

これからの 教育課程・教育活動計画 のあり方

4 資質・能力を育むための 教育課程、教育活動計画を考える

6 育成を目指す資質・能力と学ぶ内容との関係を明確化する

教育課程

検討・作成実践 ◎ 広島県立尾道北高校

育成を目指す資質・能力と各単元の関係を考えることが、
次の授業デザインにつながる

10 各教育活動の時期、内容と資質・能力のつながりを明示

教育活動計画

検討・作成実践 ◎ 山梨県立吉田高校

生徒同士の対話を通して「吉高GP」の理解を深め、
各教育活動の意味を明確化

今月の表紙メッセージ

資質・能力と 学びをつなぐ

◎どんなに立派な目標を掲げたとしても、それを達成するためのしっかりとした計画がなければ、多くのことはうまくいかないものです。学校教育も例外ではないことが、教育課程や教育活動計画を作成する点に表れています。そして、うまくいく計画というのは、すべきことが目標・目的と明確に結びついています。それこそがまさに、これからの教育課程や教育活動計画に求められている視点です。すなわち、育成を目指す資質・能力と生徒の学びをつなぐ教育課程・教育活動計画をどのようにして具現化するのかを、今号の特集では考えてまいります。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木 崇

18 主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

18 世界史

静岡県立掛川西高校 吉川 牧人

場面をスピーディーに切り替え生徒とともに授業のリズムをつくり、
思考し続ける状態に導く

22 生物

熊本県立熊本北高校 溝上 広樹

対話を重視した学びの中で知識を整理させながら、
教科の枠を超えた生きる力を養う

26 指導変革の軌跡

26 東京都立小平西高校

進路指導・学習習慣の確立

「私はできる」をスローガンに、
何事にも積極的に挑戦する学習集団を育成

30 鹿児島県立川内高校

学力向上・大学入試改革への対応

「教科指導ストーリー」を軸とする指導改善で、
生徒の深い学びを追求

34 改良！ 指導ツール ビフォーアフター

3年生 2学期

学習予定表

38 大学生による高校生のための 大学の学び 最新ナビ

38 東京工業大学「東工大立志プロジェクト」

入学当初に教養の重要性を学び、
4年間の学びの「志」を立てる

40 武蔵大学 経済学部

国内でロンドン大学の国際プログラムを学び、
2つの学位取得を目指す

42 これからの会議・研修のあり方、つくり方

思考を深める技術

44 特別レポート

次代のリーダーを育む指導のあり方

44 東京都立日比谷高校

「ゼロからイチを創る」経験を積ませながら
リーダーとしての土台を築く

48 岡山県立岡山操山中学校・高校

グローバル・リーダーに必要な5つの資質・能力を全校で共有、
中高6年間を通じ、全校体制で育む

52 VIEW'S REPORT

滋賀県・私立立命館山守中学校・高校が ICT 活用の公開授業を開催
ICT活用で、生徒の学び方改革と
教師の授業改善を図る

64 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち

「柔軟」

東京都立北園高校 鈴木 公美

<http://berd.benesse.jp>

本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます
印刷製本／(株)協同プレス 編集協力／(有)ペンダコ 執筆協力／長谷川敦、中丸 満、二
宮良太 撮影協力／荒川 潤、川上一生、田中秀和、藤木潤一、福山 哲、ヤマグチイッキ
＊本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます
＊本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます
©Benesse Corporation 2017

「学校教育デザイン」を描く②

これからの教育課程・ 教育活動計画のあり方

次期学習指導要領に関する答申や高大接続改革の実施方針に示されている通り、
今後の学校教育に求められるのは、
これからの時代に必要となる資質・能力の明確化と、それを育成する指導の確立だ。
そこで、自校では生徒にどのような資質・能力を育み、どのような教育課程や指導計画を策定して
授業・指導改善を図っていくのか、その一連のプロセスを、カリキュラム・マネジメントを通じて考え、
実践する営みを、本誌では「学校教育デザイン」と名づけ、
前号では、それを描くための第1ステップである学校教育目標のあり方について考えた。
本号では、第2ステップとして、学校教育目標において明確化した資質・能力を育むために
どのような教育課程や教育活動計画が求められるのか、
そして、それらをどのように作成していけばよいのかを考える。

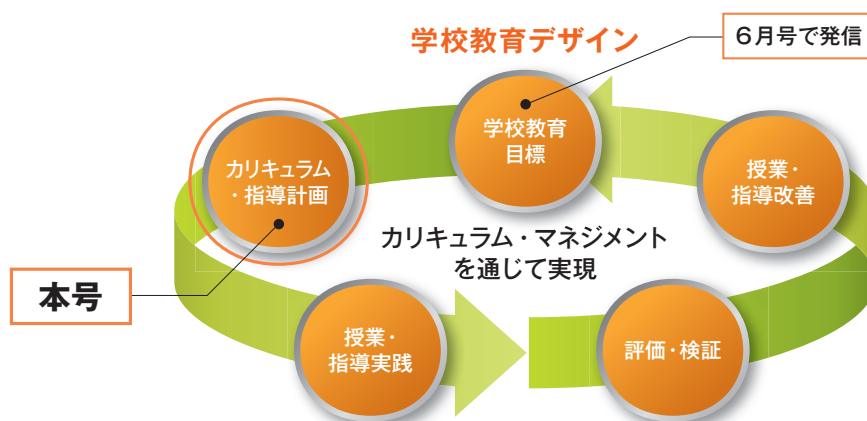
Q 各学年における、年間の教育活動計画を作成するにあたり、
今後は、どのような視点・要素を盛り込むことが必要だと思われますか。

- ◎ 3年間というスパンで考える。卒業生の理想像から逆算して、指導を考えることが大切だ。(長野県)
- ◎ 自校が考える基礎学力とは何か、各行事でどのような力をつけさせたいのか、学年ごとにどのような力をつけさせたいのか……いわゆる「学校教育デザイン」の教育目標と教育課程部分の統合した地図を細部まで描くことが必要だろう。(山形県)
- ◎ まず、各教科を通じて身につけることができる力を明文化する。次に、段階的にスキルアップを図れるよう、学年に応じて3段階に分ける。それをしない限りは始まらない。(愛媛県)
- ◎ 主体は生徒であり、すべては生徒の活動意欲を引き出すことが大切となる。年間の教育活動計画には、教師がどのように生徒とかわるのかを盛り込むとよい。具体的には問いかけ、つまりは面談だ。(静岡県)
- ◎ 学年主任に学年運営が任される学校が多いことから、縦・横を踏まえた全体的な視点が重要だと思う。(静岡県)
- ◎ 教師集団でじっくり討議し、まとめ上げた方向性を学校全体で共有し、発信できるような視点・要素を盛り込むべきだ。(兵庫県)

出典／『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは、2017年6月にウェブとファクスで実施。

2017年 特集の年間テーマ

2020年度・22年度に向けて、次の自校を創るために必要な視点を押さえた
「学校教育デザイン」を描く



本号のテーマ

学校教育目標で明確化した、育成を目指す資質・能力を踏まえ、
どのような**教育課程**や**教育活動計画**を、どのように作成するか



現場の教師の声を基にVIEW21編集部が作成した
教育課程表と教育活動計画のモデルを使い、それらを作成する意味や価値、
作成する際に校内で検討すべき点や運用のポイントを考える

教育課程表

- ◎育成を目指す資質・能力と各教科で学ぶ内容との関係を明確化した教育課程表とそのモデル ▶▶▶【P.6～7】
- ◎教育課程表の検討・作成実践 ▶▶▶【P.8～9】
広島県立尾道北高校

教育活動計画

- ◎育成を目指す資質・能力と各教育活動の関係を明確化した教育活動計画とそのモデル ▶▶▶【P.10～12】
- ◎教育活動計画の検討・作成実践 ▶▶▶【P.13～17】
山梨県立吉田高校

資質・能力を育むための 教育課程、教育活動計画を考える

これからの時代を生きる生徒にどのような資質・能力を身につけさせるのかを明確化し、それを育成するための指導の確立が今、求められている。具体的な指導を進めていく上でのよりどころとなるのが教育課程、教育活動計画である。今後求められる教育課程、教育活動計画は、これまで学校現場で運用されてきたものとのような点が異なるのか、実際に運用する際のポイントは何か、実践事例を交えて考えていく。

学校教育目標を打ち出し 次の一步を踏み出す

本誌6月号の特集では、AI（人工知能）の発達などを背景に予測困難な変化を遂げていくこれからの時代を切り拓いていくため、各校が、自校の生徒に必要な資質・能力（コンピテンシー）を明確化し、それらを育成する指導を確立できるように、次の自校の姿を描く「学校教育デザイン」という考え方を提示した。「学校教育デザイン」は、学校教育目標から教育課程・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証、そしてさらなる授業・指導改善まで

の一連のサイクルを、教科間・教師間で連携をしたり、地域や保護者等の外部資源を活用したりしながら学校全体で回していく営みを指すものだ（図1）。

そして、同号では、「学校教育デザイン」の第1ステップであり、最も重要な要素の1つである学校教育目標について、これからのあり方を考えた。

これからの学校教育目標には、自校が生徒にどのような資質・能力を育成するのかを明確化することが求められる。そして、育成を目指す資質・能力は、学習指導要領を受け止めつつ、校訓や校是、建学の精神、

図1 「学校教育デザイン」概念図

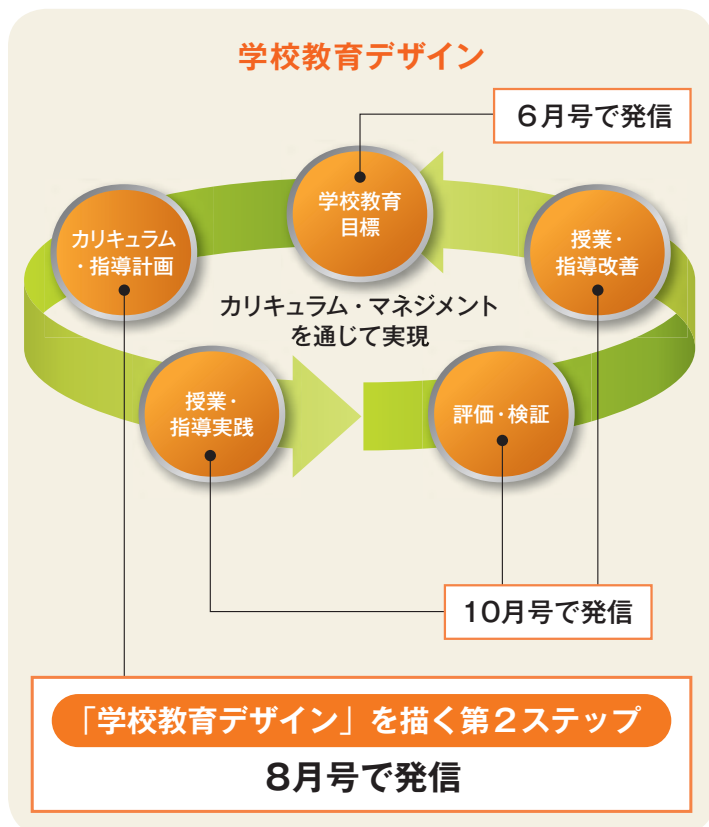
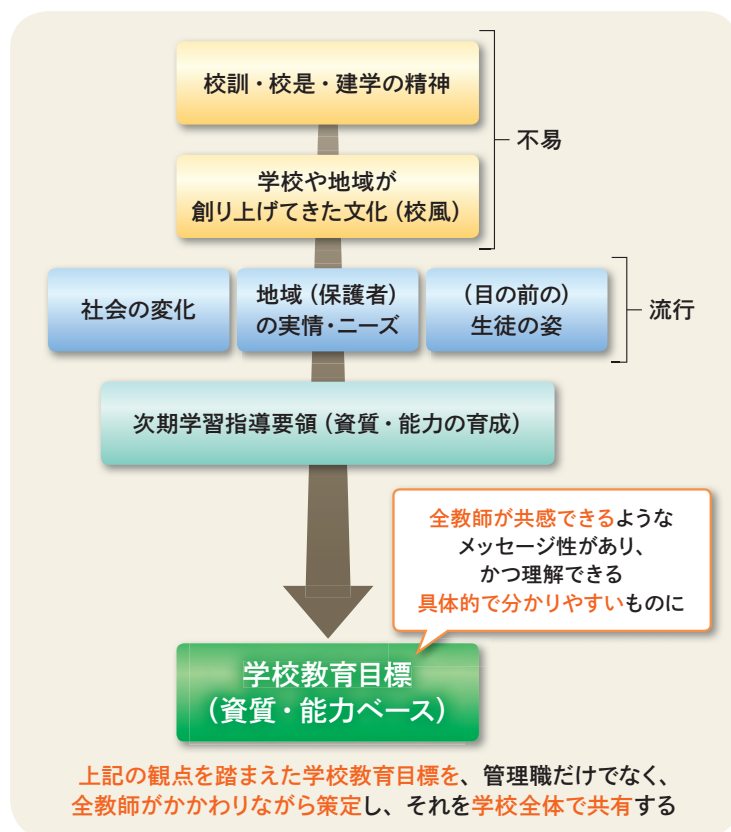


図2 これからの学校教育目標のあり方

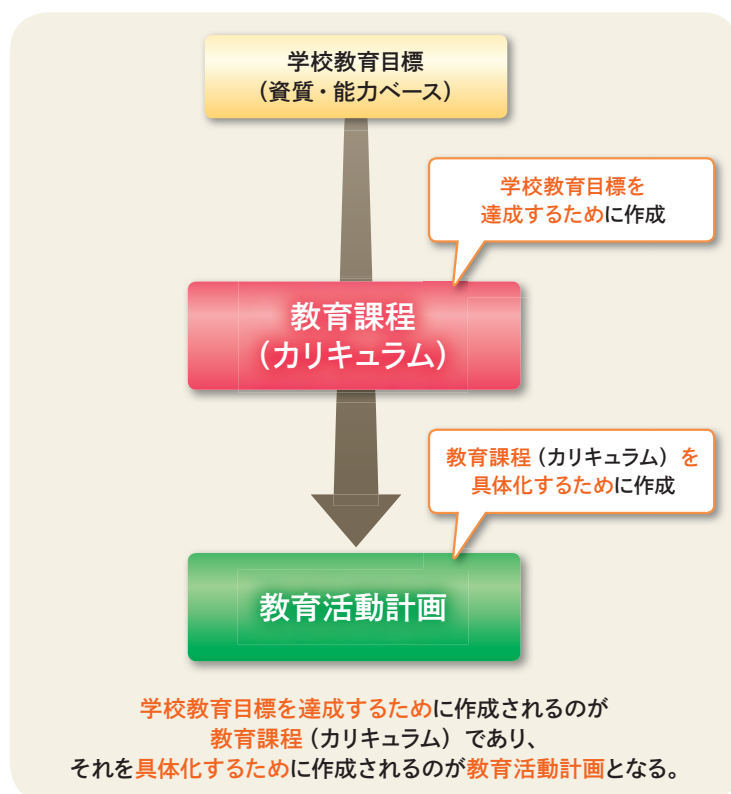


学校や地域が創り上げてきた文化（校風）など、教育の根幹である「不易」の視点と、社会の変化や地域の実情、生徒の姿といった「流行」の視点を踏まえて考えることが求められる。さらに、学校教育目標は、管理職などの一部の教師だけでなく、全教師がかかわりながら策定することが望ましく、策定した学校教育目標は、学校全体で共有することはもちろん、地域や保護者などとも分かち合うことが重要である（図2）。

資質・能力の育成の道筋を示す

そして今号では、学校教育目標として明確化した資質・能力を何を学ぶことで育成するのかを示した「教育課程」と、教育課程で示した教科外としての学校行事・部活動等の教科外の教育活動をいつ、どのような指導観点・ツールで行っていくのかをまとめた「教育活動計画」について考えていく（図3）。

図3 学校教育目標・教育課程（カリキュラム）・教育活動計画の位置づけ



一般に、教育課程表は「何を教えるのか」を履修単位数とともに記述したものであり、そこからは学校教育目標として掲げる「育成する資質・能力」を見いだすことは難しい。そこで今号では、「学校教育デザイン」の考え方から、「何ができるようになるか」を見通す教育課程表のモデルとその作成について、まずは提案する。

さらに、授業などの教科の活動だけでなく、学校行事や部活動といった教科外の活動も含め、それぞれの教育活動を通じて生徒にどのような資質・能力を育むのかを明確化した教育活動計画が、今後ますます求められると考えられる。今回提案する教育活動計画も、まさに学校のすべての教育活動と学校教育目標とのつながりを明確化し、各活動における教師の指導、そして生徒自身の学びをよりよくするものとして参考にしたい。

育成を目指す資質・能力と 学ぶ内容との関係を明確化する

教育課程に求められる 「学びの地図」の役割

「教育課程」については、現行の学習指導要領では次のように定義されている。

教育課程は、各教科・科目、総合的な学習の時間及び特別活動についてそれらの目標を達成するために、教育の内容を学年ごとに、または学年の区分によらずに授業時数や単位数との関連において総合的に組織した学校の教育計画（「高等学校学習指導要領解説総則編」2009年7月 文部科学省）

中央教育審議会の次期学習指導要領に関する答申（*）では、現行課程の現状について、「言語活動の導入により、思考力等の育成に一定の成果は得られつつあるものの、教育課程全体としてはなお、各教科等において『教員が何を教えるか』と

いう観点を中心に組み立てられており、それぞれ教えるべき内容に関する記述を中心に、教科等の枠組みごとに知識や技能の内容に沿って順序立てて整理したものとなっている。そのため、一つ一つの学びが何のためか、どのような力を育むものかは明確ではない」と指摘されている。本誌4月号の特集でも解説した通り、次期学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」の実現を、目指す基本理念としている。答申で示された「社会に開かれた教育課程」の3つの側面（図1）の②からも分かるように、教育課程それ自体に、学校教育を通じて育む「生きる力」とは何かを資質・能力として明確化し、「学びの地図」として生徒自身が学びの意義を自覚する手がかりを見いだすものとするのが求められている。また、教育課程編成の際には、教科等と教育課程全体の結びつ

きや、教育課程と資質・能力の関係を明らかにし、縦（学年間、学校段階間）と横（教科間）のつながりを意識することが求められる。

以上のことから、これからの教育課程編成上、必要な視点は次のようにまとめることができる。

視点① 育成を目指す資質・能力と学ぶ内容との関係（教育課程全体と教科等のつながり）の明確化

視点② 縦（学年間、学校段階間）と横（教科間）のつながり

学ぶ内容と育む資質・能力の つながりを明確化

そこで、VIEW21編集部では、右記の視点を踏まえた教育課程を具体化するために、現場の教師から様々な意見・アイデアをもらい、資質・能力と教科等で学ぶ内容とのつながりを明確化する教育課程表のモ

図1 「社会に開かれた教育課程」とは

- ① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
- ② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。
- ③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

*中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」を基に編集部で作成

デル（図2）を作成した。これは、1つめの視点である「育成を目指す資質・能力と学ぶ内容との関係（教育課程全体と教科等のつながり）の明確化」の具現化を最も意識して作成したものである。そして、今回示した教育課程表のモデルは、教科・科目ごとに作成することを想定しているが、そうすることで、2つめの視点である「縦（学年間、学校段階

*中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」



図2 教育課程表のモデル

[illegible]

図3 従来の教育課程表の一例

教科	科目	標準 単位数	1年		2年				3年			
			普通科	理数科	普通科		理数科		普通科		理数科	
					文系	理系	文系	理系	文系	理系	文系	理系
国語	国語総合	4	5	5								
	国語表現	3							2			
	現代文B	4			3	2	2	2	2	2	2	2
	古典B	4			3	3	3	2	3	3	3	3
	世界史A	2	2				2	2				

間」と横(教科間)のつながり」を検討しやすくしている。例えば、各教科・科目の教育課程表を並べて見通すことで、「国語のこの単元を通じて伸ばしたい資質・能力と、日本のこの単元で伸ばしたい資質・能力は共通しているので、近いタイミ

「ングで学べるようにしよう」といった工夫を見いだすことができる。

今回提示した教育課程表のモデルにも、その教科・科目を何単位で履修するかを示すようにしているが、総履修単位数が各教科・科目にどのように振り分けられるかがひと目で分かる従来の教育課程表(図3)も実務上、引き続き必要とされるであろう。したがって、これからは、今回示したような、育成を目指す資質・能力と各教科・科目で学ぶ内容との関係が明確化した教育課程表と、総履修単位数の振り分けを示した従来の教育課程表の大きく2つの形が求められるのではないかというのが、ヒアリングした現場の教師の共通した意見だ。

今回提示した教育課程表のモデルを活用するイメージが持てるよう、教育課程表のモデルの作成にあたってご意見・アイデアをいただいた教師の1人、広島県立尾道北高校の進路指導主事である三保光成先生に、先生の担当科目である日本史で教育課程表を実際に作成していただきたい。次ページでその具体的な内容を見ていく。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け→バックナンバー→2017年度8月号」をご覧ください。

育成を目指す資質・能力と各単元の関係を考えることが、次の授業デザインにつながる

◎ 広島県立尾道北高校

5つの資質・能力の育成を目指す教育内容を検討

広島県では、コンピテンシー（資質・能力）の育成を目指した主体的な学びを促す教育活動を推進する「広島版『学びの変革』アクション・プラン」を2014年度に策定、18年度から全県的にコンピテンシー育成を展開する計画だ。17年度現在、県内24の高校が「学びの変革」のパイロット校に指定され、課題発見・解決学習を取り入れたモデルカリ



広島県立尾道北高校
三保光成 校長
教職歴27年。同校に赴任して10年目。進路指導主事。地理歴史・公民科主任。



広島県立尾道北高校校長
好村孝則 副校長
教職歴37年。同校に赴任して3年目。全国高等学校長協会副会長。

キュラムを作成し、取り組んでいる。そのうち、広島県立尾道北高校は、「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）を中核に据えながら、教科学習を「習得と探究のサイクル」の観点から有機的に結びつけ、生徒の主体的な学びの深化を図る教育活動の研究と実践を「尾北イノベーション」

広島県立尾道北高校

- ◎ 校是を「至誠一貫」、校訓を「自尊・自持・自制」とする。1998年度に総合学科に移行。2015年度に広島県「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」の「学びの変革」パイロットスクールのうち「探究コース」支援事業」の指定を受ける。
- ◎ 設立 1925（大正14）年
- ◎ 形態 全日制／総合学科／共学
- ◎ 生徒数 1学年約200人
- ◎ 2017年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、北海道大、東京大、京都大、大阪大、神戸大、広島大などに134人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ294人が合格。
- ◎ URL <http://www.onomichikita-hiroshima-c.ed.jp/>

と銘打ち、全校で取り組んでいる。

これについて、好村孝則校長は、「他者と協働して未来について思考し、社会に変革を起こすための手立てを提案・実行できる力を生徒に育むための学びの変革だ」と説明する。

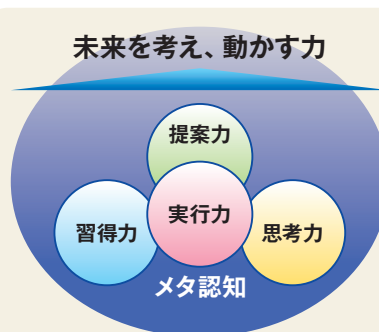
「『尾北イノベーション』では、育成すべき資質・能力として『習得力』『思考力』『提案力』『実行力』、そして『メタ認知』の5つのコンピテンシーを定義しました（図1）。総合学習はもちろん、教科学習、『産業社会と人間』、LHRで、5つのコンピテンシーの育成を強く意識した教育活動が行われることになりました」（好村校長）

生徒の主体性を尊重する「学びの地図」として

今回、VIEW21編集部作成の教育課程表のモデル（P.7図2）を使って、同校の「学びの変革」委員会の委員で地理歴史・公民科主任の三保光成先生に、同校で育成を目指す資質・能力と「日本史B」の学習内容との関係を整理していただいた（図2）。

「今回、生徒の学びを俯瞰する作

図1 尾道北高校で育成する5つのコンピテンシー



尾道北高校では、「学びの変革」委員会を中心に、5つのコンピテンシーについて継続的に話し合いを続けている。既に、思考力については、すべての教科でその定義を明文化する作業をしているところだ。

* 学校資料を基に編集部で作成

業を通して改めて思ったのは、本校が育成を目指す5つのコンピテンシーはどれも上位で下位と下位の順番のあるものではなく、すべてが関連し合っているという点についていくものだという事です。作成した教育課程表を見ながら、『この単元において、個別の事象から概念、法則を導き出し、提案や実行へとつながるような問いかけにはどのようなものがあるだろうか』と自問しながら。教科団で授業について議論する材料にもなり、指導力の向上にも

「学校教育デザイン」を描く②
これからの教育課程・教育活動計画のあり方

図2 三保先生作成「日本史 B」の教育課程表

(広島県立尾道北) 高等学校 (平成29) 年度 第 () 学年 【教科・科目】(地理・歴史 日本史B) 教育課程表									
			【教科・科目】(地理・歴史 日本史B) 【単位数】() 単位						
分野・単元 育成を目指す 資質・能力			(1) 原始・古代の日本と東アジア	(2) 中世の日本と東アジア	(3) 近世の日本と世界	(4) 近代日本の形成と世界	(5) 両世界大戦期の日本と世界	(6) 現代の日本と世界	
			ア 歴史と資料 イ 日本文化の黎明と古代国家の形成 ウ 古代国家の推移と社会の変化	ア 歴史の解釈 イ 中世国家の形成 ウ 中世社会の展開	ア 歴史の説明 イ 近世国家の形成 ウ 産業経済の発展と幕藩体制の変容	ア 明治維新と立憲体制の成立 イ 国際関係の推移と立憲国家の展開 ウ 近代産業の発展と近代文化	ア 政党政治の発展と大衆社会の形成 イ 第一次世界大戦と日本の経済・社会 ウ 第二次世界大戦と日本	ア 現代日本の政治と国際社会 イ 経済の発展と国民生活の変化 ウ 歴史の論述	
資質・能力			資質・能力の説明						
習得力 (基礎力)	知識 FACT	事実や過程についての知識 「いつ」、「どこで」、「誰が」、「何か」、「なぜか」、「どのようにしてか」などの事実や過程についての知識	完新世、磨製石器、三内丸山遺跡、土偶、竪穴住居、環濠集落、邪馬台国、古墳、乙巳の変、大宝律令、聖武天皇、東大寺大仏、万葉集、藤原北家、外戚	保元・平治の乱、日宋貿易、承久の乱、蒙古襲来、足利尊氏、明德の乱、正長の徳政一揆、勘合貿易、分国法	織田信長、豊臣秀吉、太閤検地、朱印船貿易、関ヶ原の戦い、武家諸法度、徳川吉宗、享保の改革、田沼意次、株仲間、寛政の改革、ラクスマン、フェートン号事件	ペリー、日米和親条約、桜田門外の変、薩長連合、戊辰戦争、版籍奉還、徴兵令、地租改正、自由民権運動、西南戦争、松方正義、日清戦争、日露戦争、大阪紡績会社	第一次護憲運動、米騒動、日本農民組合、大戦景気、昭和恐慌、ロンドン海軍軍縮条約、幣原喜重郎、満州事変	五大改革指令、朝鮮戦争、サンフランシスコ平和条約、池田勇人、日中共同声明	
	理論 THEORY	複数の事実や過程から導き出された法則性〔一般理論〕 「なぜか」、「どうなるか」、「何か」という「問い」に対して、そこから類似の他の事象も説明することができる一般理論	縄文時代 弥生時代 古墳時代 ヤマト政権 律令国家 摂関政治	荘園公領制 封建制度 鎌倉仏教 守護領国制	織豊政権 幕藩体制	明治維新 藩閥政治 立憲国家体制 大日本帝国憲法 産業革命	第一次世界大戦 政党政治 ワシントン体制 経済恐慌 太平洋戦争	日本国憲法 占領政策 冷戦体制 55年体制 高度経済成長 バブル経済	
思考力	論理的思考力 LOGICAL Thinking	根拠をもとに、主張や結論を導き出す思考	○	○	○	○	○	○	
	批判的思考力 CRITICAL Thinking 判断力	他者や自分の考え・行為などを再考し、よりよい判断をする思考 「本当にそうなのか?」と疑問を持ち、自分で判断する思考	○	○	○	○	○	○	
提案力	創造的思考力 CREATIVE Thinking	課題を発見し、その課題の原因と解決策を生み出す思考 どうすればよかったかを考え、生き方・あり方を考える思考	○	○	○	○	○	○	○
	表現力 プレゼンテーション能力	自分で創造したことを、言語などで表現する力			○		○		○
実行力	調査・研究活動 フィールドワーク	自分で、客観的な資料を収集して実証したり、他の事例を調べようとする態度、行動	○	○	○		○		○
	行動力	歴史に学んで行動しようとする態度、行動	○	○	○	○	○	○	○

*三保先生が作成した教育課程表を基に編集部で作成

つながると思います」(三保先生)

同校は既に学校教育目標として5つのコンピテンシーを定義しているが、それがなければ作業は難航しただろうと、三保先生は考える。

「学校教育目標が資質・能力ベースで明確に定まっていたことで、各教科・科目において育成を目指す資質・能力の定義もうまくいきました。自校で育てたい生徒像を構造化する道筋を考える上で、資質・能力ベースの学校教育目標は不可欠です」(三保先生)

難関大学志望者の多い同校では、各単元で保証すべき資質・能力として、習得力、思考力に○が多く入った。提案力や実行力については、生徒自身の興味・関心、さらに目指す進路によって変わってよいと好村校長は考える。

「学校として学びの土台は築きながら、その上に生徒一人ひとりが自分のカリキュラムを完成させることで、より主体的な学びが実現するはず。生徒が描いた多様な『学びの地図』を教師が認め、違いを楽しむことで、学校の教育目標に向かった生徒主体の授業がデザインできると思います」(好村校長)

各教育活動の時期、内容と 資質・能力のつながりを明示

現場の声を基に作成した 教育活動の実施計画モデル

これからの学校教育においては、教育課程として明確化する教科を中心とした教育計画だけでなく、学校行事や部活動等の教科外の活動についての教育計画のあり方を考えることも求められる。教育課程同様、教科外の活動における教育計画も、各教育活動を通じて生徒にどのような資質・能力を育むのか、すなわち、各教育活動の内容と育成を目指す資質・能力との関係を明確化することが重要であろう。そして、学校行事や部活動等の各教育活動を3年間でどう展開していくのか、教育活動全体の実施計画を作成することが、各教育活動の着実な実践と、学校教育目標の実現のためにも求められる。

これまで、学校行事や部活動等の教科外活動について、自校の生徒に

育みたい資質・能力と関連づけて活動内容を吟味する学校は決して多くはなかったのではないだろうか。事実、VIEW21編集部が現場にヒアリングしたところ、「学校行事は前年・前任者踏襲になりがち」「生徒にとって息抜きになればよいと、教育活動ではなく、単なるイベントとして捉える傾向にある」といった声もあった。

だが、今後求められるカリキュラム・マネジメントの視点で考えると、学級・学年活動、文化祭や体育祭、進路講演会といった学校全体の行事、部活動なども資質・能力育成のための教育活動として、授業などの教科活動と有機的に関連づけていくことが求められる。

そこで、VIEW21編集部では、教育課程表と同様に、現場の教師から様々な意見・アイデアをいただき、教科外活動も含めた各教育活動の内

容と、そこで育成を目指す資質・能力を明確化し、各活動を3年間でどのように展開していくのかが見渡せる教育活動計画のモデル(図1)を作成した。

各教育活動でどのような 資質・能力を育むのかを明確化

教育活動計画のモデルの構成を具体的にみていく。同モデルの左側は、各教育活動を通じて生徒にどのような資質・能力を育むのか、すなわち、各教育活動の内容と育成を目指す資質・能力との関係を明確化する部分である。教育課程表のモデル同様、それぞれの教育活動で特に生徒に伸ばしてほしい資質・能力に「○」や「□」などで印をつけ、各教育活動と育成を目指す資質・能力の関係を明確化する。

同モデルの右側は、各教育活動を

いつ、どのようなことに重点を置きながら、どのような方法・手段を使って指導していくのかを示す、教育活動の実施計画部分となる。ここでは、各教育活動の個別の内容まで落とし込むことになる。

このような実施計画を作成することで、各教育活動を担当する教師は、指導のポイントを視覚的に確認できる。その結果、教育活動のねらいが、学校教育目標から無自覚にぶれてしまふのを防ぐことができ、また、各教育活動を有機的に結びつけて指導することが可能になる。

実施計画のよりどころとして の年間指導ストーリー

この実施計画の最も重要な要素の1つが、年間の指導ストーリー部分である。ここは、月、学期など、ある程度の期間のまとまりの中で、目指す資質・能力をどのような視点で指導していくのか、年間の指導の大きな方向性を示す部分である。この大きな指導のストーリーがあつて初めて、各教育活動の個別の実施計画に落とし込むことができる。

では、3年間の指導ストーリーは、

図1 教育活動計画のモデル

() 高等学校 () 年度入学生 第 () 学年 教育活動計画

教育活動		育成を目指す資質・能力	指導計画	
活動種類	活動名		指導ストーリー	
			4月	5月
			活動名	
			指導テーマ	
			指導ツール	
			活動名	
			指導テーマ	
			指導ツール	
			活動名	
			指導テーマ	
			指導ツール	
			活動名	
			指導テーマ	
			指導ツール	
			活動名	
			指導テーマ	
			指導ツール	
			活動名	
			指導テーマ	
			指導ツール	
			活動名	
			指導テーマ	
			指導ツール	

自校で育成を目指す資質・能力の数に合わせて、この欄を縦に分割し、左に挙げた教育活動それぞれについて、特に生徒に伸ばしてほしい資質・能力に「◎」や「○」などの印を記入する(P.13 図2の山梨県立吉田高校の教育活動計画を記入例として参照)。

月、学期など、ある程度の期間のまとまりの中で、目指す資質・能力をどのような視点で指導していくのか、年間の指導の大きな方向性(=3年間の指導ストーリー)を記入する。

各教育活動について、どのようなことに重点を置いて指導するのかを「指導テーマ」の欄に、指導にあたってどのような方法・手段を使うのかを「指導ツール」の欄に記入する。

図2 3年間の指導ストーリー作成

先生方から伺った検討ポイント

今のストーリーを生かす

現在学校にある指導ストーリーを基にしながら、変化への対応を盛り込む

3年生からの逆算で考える

推薦・AO入試拡大に伴って入試対応スケジュールが変わる3年生からの逆算でストーリーを考える

中高接続期⇔受験生切り替え期

中高接続期指導で何を意識づけし、定着させるか、入試に向けて、何を切り替えていくかを考える

生徒・保護者に示せるもの

次年度に1年生となる生徒・保護者に、自校の指導に安心感を持ってもらえるものにする

具体的にどのように検討すればよいのか。その検討ポイントを現場の教師にヒアリングしたところ、図2で示す4点にまとめられた。また、3年間の指導ストーリーの具体例を、生徒が主に4年制大学に進学する学校の場合と、大学進学だけではなく就職などもする、生徒の進路が多様である学校の場合の2パターンで、現場の教師の声を基に作成した(P.12 図3)。自校の3年間の指導ストーリー作成の参考にされたい。

この3年間の指導ストーリーを含む教育活動全体の実施計画は、具体的にはどのようなステップで、どのような点に留意しながら作成すればよいのか。そして、その作成を通じて教師には何が見えてくるのだろうか。P.13より、自校で育成を目指す資質・能力を学校教育目標において明確化した山梨県立吉田高校(本誌6月号特集P.10～13で紹介)による、教育活動計画の検討と作成の、その実践から考えていく。

図3 3年間の指導ストーリー例

生徒が主に4年制大学に進学する学校の場合

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年生	【適応】3年間の展望（自校で3年後にどうなっていきたいか、身につけるべき力）の提示			【自己理解】自分の現状の力（学力・学び方・総合的な力）を知る、自分の興味・関心を知る、他者からのアドバイスの機会を設ける（自分を客観的に見つめる、考える機会） 【社会理解】職業研究から、社会全体への課題を考える			【課題と向き合う】自らのキャリア希望に向けた課題の克服、苦手と向き合う（苦手教科、思考・判断・表現力、課題研究まとめ）					
	【把握】入学生の特性を把握し、指導に生かす			【学習習慣確立】入学時からの学習習慣（予習・授業・復習）が2学期でも続けられている			【量から質への転換】学習の入学時からの学習習慣（予習・授業・復習）が2学期でも続けられている					
2年生	【再出発】高1の体験を踏まえた積み残しの確認（自分で語らせる）			【経験・視野の幅を広げ、学びを深める】課外活動、知識・技能の定着を深める			【高校の学び中間総括】何ができるようになったかの自覚と自信、希望進路につなげる			【目標への基礎完成度を確認】入試・卒業までに身につけたいレベルとのギャップ（資質・能力）を確認する		
				【生徒個々に応じた力の引き上げ】生徒の希望進路や学習習慣や学習方法に差がつく時期に、個別での進路相談（迷わせ、揺さぶり、プラスの声かけで導く）、学習支援			【希望進路の揺さぶりと明確化】志望校検討、併せて志望校群入試に向けての戦略を立てる			【AO・推薦生徒の引き上げ】学びの総括からチャレンジの可能性のある生徒を引き上げる		
3年生	【キャリアプランの振り返り・再構築】出願戦略を立てる 【生徒個々に応じた目標設定】目標に応じたアドバイス			【資質・能力 集大成発揮】これまで学んだことの集大成を発揮、思考力の自己表現 2年間の経験値を確かめて、そこからスタートさせる			【進路実現】進路実現に向けた個別対応 進学先決定後のレディネスのアドバイス					

生徒の進路が多様である学校の場合

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年生	【適応】通学・学習の意義認知 生活習慣や礼儀の確認 学校帰属意識を高める 自分への興味を持つ			【自己理解】高校生としてのリスタート。科目選択に向けた自己理解 【社会理解】生き方を考える／自分を見つめ直す			【社会と向き合う】10年後の自分を見つめてみる（社会に出た時の自分をイメージする）					
	【自信】学力以外の物差しで生徒を見る。負のレッテルはがし。やったらできたの繰り返し			【学習姿勢】学習姿勢づくり 2回目の初期指導			【学習成果の山場】学びの基礎診断から逆算し、到達目標と現状の差を確認する			【学習への自信】1年間のまとめ、振り返りから成長を感じ自信を持つ		
2年生	【中間到達】1年次の学習の補完			【経験・視野の幅を広げ、学びを深める】学校の外での活動、中だるみの気持ちを引き締める。経験を広げ、思考を深める			【進路選択の揺さぶりからマインドセット】2学期を通じて本人が考えた進路選択になっているかを、揺さぶりをかけ2学期中に意志を固める			【就職・進学・AO・推薦の見極め】生徒の進路選択のいつたんの腹決め		
				【学びを深める】強みを伸ばす指導 先輩の様子を見せて、1年後からの逆算で学習や進路選択への意欲を喚起			【中間ゴールと学びの総括】「進路決定への通過点」としての学びの基礎診断。求められる到達目標のクリア。身につけてきたことの総括			【フォローアップ】進路目標に応じた、到達目標とギャップのある生徒への対応		
3年生	【キャリアプランの振り返り・再構築】これまでの高校生活で身につけたことを再整理し、進路目標に応じて必要になる力を確認する			【資質・能力 集大成発揮】これまで学んだことの集大成を発揮、思考力の自己表現			【ギャップターム】次の進路までの準備。ブリッジ指導 内定後指導。社会体験（運転免許）を通じて、初めて社会の厳しいルールを体験させる					

「学校教育デザイン」を描く②
これからの教育課程・教育活動計画のあり方

教育活動計画
検討・作成実践

生徒同士の対話を通して「吉高GP」の
理解を深め、各教育活動の意味を明確化
◎山梨県立吉田高校

教育活動計画の検討に
生徒が参加

育成を目指す資質・能力を学校教育
育目標「吉田高校グラデュエーショ
ン・ポリシー（以下、吉高GP）」と
定義した山梨県立吉田高校では、あ

図1 「吉田高校グラデュエーション・
ポリシー」（吉高GP）

- ① 自己肯定力 達成感を積み重ねることで、自信をつけます
- ② 傾聴力 他者の意見を謙虚に聴く習慣を身につけます
- ③ 分析力 事実を客観的に分析する習慣を身につけます
- ④ 思考力 物事を鵜呑みにせず、「何故か」を考える習慣を身につけます
- ⑤ 発信力 自分の考えを、わかりやすく他者に伝える方法を身につけます
- ⑥ 想像力 未来（結果）を考え、想像する力を身につけます
- ⑦ 創造力 課題を解決する方法を創造する力を身につけます
- ⑧ 行動力 自身の考えに基づき、行動する力を身につけます

*学校資料を基に編集部で作成

らゆる教育活動において、生徒、教師が各活動と吉高GPとのつながり
を意識しながら取り組んでいる（本
誌6月号・特集P.10～13で紹介）。

今回、同校はVIEW21編集部が
作成した教育活動計画のモデルを
使って、1年次に年間を通して生徒
にどのような力を育むのか、それぞ
れの時期にどのような教育活動をど
のようなねらいの下に実施するの
か、そして、各活動において吉高G
Pで定められた8つの力（図1）の
うち、特にどの力を育成するのかを
検討した。

その検討は、吉高GPの8つの力
が日々の学校生活の中で養うもの
であることを、生徒と教師がこれま
で以上に意識する機会となった。さ
らには、今後、同校において、学年
や教科、クラスで個々の教育活動の
詳細な指導計画を作成する際、各活

図2 教師が作成した吉田高校の教育活動計画（抜粋）

教育活動		育成を目指す資質・能力								指導計画	
活動種類	活動名	自己 肯定力	傾聴力	分析力	思考力	発信力	想像力	創造力	行動力	指導ストーリー：意識させる・浸透させる（学力観・学習習慣・生活習慣・8つの力）	
										4月	5月
学校行事	式典・ 全校集会		○				○			入学式・全校集会 話を聞く態度を育成する	
学習	学習指導			○					○	学習指導・ガイダンス 授業への取り組み方を身につけさせる 学習時間記録表・Yoshida Career Guide	学習指導 授業への取り組み方を身につけさせる 学習時間記録表・Yoshida Career Guide
学校行事	校歌・応援歌 練習	○					○			校歌・応援歌指導 達成感を味わわせる	
学習	実力テスト・ 定期考査			○	○					実力テスト 知識の定着度を測る 自校作成テスト	第1回・定期考査 知識の定着度を測る 自校作成テスト
学習	模擬試験			○				○			模試 結果を分析する
学校行事	蒼風祭 体育祭 球技大会	○						○			
学校行事	富士登山 強歩大会	○					○				
学校行事	生徒指導に関 する講演会・ 集会・活動		○				○			交通安全教室 想像力を鍛え事故を防止する	防災避難訓練 想像力と行動力を養う
学校行事	進路に関する 講演会・集会・ 活動			○				○		進路調査・意識調査 自分を分析し将来につなげる 自校作成アンケート	
学校行事	環境に関する 活動・大掃除・ 校外清掃活動			○					○		

*学校が作成した教育活動計画を基に編集部で作成

動と育成を目指す資質・能力とながりが常に明確になり、指導のぶれを防げるといった効果が期待された。

しかし、教育活動計画の作成には懸念もあった。それは、各活動で養う力を決めてしまうことで、学年やクラスの特性に応じた柔軟な指導を阻害し、取り組みの形骸化につながるのではないかという点だ。

そこで同校では、管理職など一部の教師が作成した教育活動計画をトップダウン的に全校に周知するのではなく、管理職と各分掌主任、そして、各学年主任による教育活動計画の作成（P.13図2）と並行して、教育活動の当事者である生徒も教育活動計画の作成にかかり、その意義を話し合った。教師は自分たちと生徒、異なる視点での教育活動計画の作成を踏まえて、よりよい教育活動計画のあり方を検討した。

ここからは、学校教育目標である吉高GPの実現のための教育活動計画を、どのように作成・運用すべきかを吉田高校の生徒が語り合った様子と、生徒の対話を観察する中で同校の教師が得た、教育活動計画作成のポイントについて報告する。

生徒による、教育活動計画検討会

学校の教育目標を、私たちはどのように理解しているか

1、3年生が学校行事で身につく力を検討

生徒による教育活動計画の検討は、次のような形で行われた。

まず、第1フェーズとして、1、2年生の各クラス代表11人が、1年次の授業から文化祭、校歌・応援歌練習、課外学習、朝読書に至るまでの様々な教育活動について、それぞれ吉高GPの8つの力のうち、特に身につくと考えられる2つの力を

学校生活での経験やそこでの気づきを語り合いながら、教育活動計画の検討に臨む生徒たちと、その議論の様子を見守る教師たち。

2時間にわたって検討した（図3）。話し合いに際しては、同校の高保裕樹校長が作成したルーブリック（図4）が、8つの力の意味をよりリアルに理解するための参考資料として活用された。それと並行して、3年生のクラス代表7人が、これまでの高校生活を振り返りながら、生徒目線で8つの力の意味を約1時間話し合った。なお、クラス代表を含む全校生徒は、7月に行われた文化祭「蒼風祭」で、自分は8つの力のうちの

図3 生徒が考えた各教育活動で身につく資質・能力（抜粋）

教育活動		育成を目指す資質・能力							
活動種類	活動名	自己肯定力	傾聴力	分析力	思考力	発信力	想像力	創造力	行動力
学校行事	式典・全校集会		○						○
学習	学習指導			○			○		
学校行事	校歌・応援歌練習	○			○				
学習	実力テスト・定期考査			○	○				
学習	模擬試験			○			○		
学校行事	蒼風祭、体育祭、球技大会	○				○			
学校行事	富士登山強歩大会	○							○

*生徒が作成した教育活動計画を基に編集部で作成

どの力を身につけたいかを事前に考え、文化祭の後に自己評価を行った。その上で、第2フェーズでは、第1フェーズの話し合いに参加した生徒のうち各学年2人、計6人が教育活動計画の検討に参加し、8つの力の関係性や、各活動で8つの力のうちの力が身につくのかを話し合った。

8つの力について仲間と話し合い、さらに、文化祭という教育活動で自分が身につけたい力を考えた上でその活動に臨んだ経験を持ち寄っ

「学校教育デザイン」を描く②

これからの教育課程・教育活動計画のあり方

図4 8つの力のルーブリック

力	説明	学習	社会性	自己学習	課題解決
自己調整力	小さなことにも規律性・達成感を覚えることができる	自分の能力や進歩を認めることができる	自分の進歩を認め、積極的に進んでいくことができる	他人の長所と自分の長所を認め、自分の長所に責任が持てる	
傾聴力	相手の話を静かに聞くことができる	相手の話を聞きながら、自分の話を整理することができる	相手の話から、自分の考えの共通点・相違点を整理し、自分の考えを整理することができる	共通点には賛同し、相違点には賛同しなから相手の話を聞くことができる	
交渉力	状況を客観的に観察することができる	観察した状況から問題点や課題を洗い出すことができる	状況を整理し、問題点や課題を洗い出すことができる	問題点を整理し、次のステップに移る手段を提案することができる	
思考力	日常生活で「何故？」を感じることができる	感じた疑問に対して解決する方法を洗い出すことができる	感じた疑問に対して解決する方法を洗い出すことができる	自分の考えを整理し、他人に説明することができる	
発信力	相手に伝えたいことがあると見える	伝えたいことを、自分の言葉で表現することができる	伝えたいことを、相手に伝えることができる	伝えたいことが伝わりやすいように、工夫して伝えることができる	
連携力	物事や行動の結果を、自分の経験や知識の状況と照らし合わせて考えることができる	物事や行動の結果を、自分の経験や知識の状況と照らし合わせて考えることができる	これからのことを、現在の状況から考えることができる	自分の状況を、現在と比べて考えることができる	
計画力	過去の半端なまま、現在を始めることができる	過去の半端なまま、現在を始めることができる	過去の半端なまま、現在を始めることができる	過去の状況を、現在と比べて考えることができる	
行動力	決められたことは素直に実行することができる	決められたことを、そのままだけで実行することができる	決められたことを、そのままだけで実行することができる	決められたことを、そのままだけで実行することができる	

*学校資料をそのまま掲載

生徒たちによる、第2フェーズにおける話し合いの様子をダイジェストで紹介する。

学校行事で身につく力は極めて多彩

後藤 教育活動計画を最初に見た時に、どのような感想を持ちましたか。
佐藤 「この行事では、8つの力のうちのこの力を伸ばすんだ」というように、目的意識を持って行事に臨めるのではないかと思います。

後藤 教育活動計画では、活動内容が異なる文化祭・体育祭・球技大会はひとくくりになっていますが、3つの行事に共通点はありますか。

鴻巣 3つともクラス単位で動く場面があるから、団結力を求められることが多い点が共通しています。

鶴崎 団結力は吉高GPにはないので、団結するためには8つの力の中でどの力が必要なのかを考えてみませんか。例えば、意見の対立を乗り越えるには、傾聴力が必要ですよ。

鴻巣 団結するためには、目標が必要で、さらに目標を強く打ち出す発信力も求められると思います。

滝口 リーダーは、傾聴力を持って周りの人の思いに耳を傾け、心の中を想像した上で発信しないと、周りがついてこないですよ。

佐藤 発信力と傾聴力は一体になって初めて、その力が発揮されるもののような気がしてきました。

小俣 球技大会を振り返ると、勝たない気持ちが強くなりすぎて、スポーツが苦手な人が置き去りにされていた気がします。得意な人が苦手な人を支える関係があつてこそこの行事を通して、自己肯定力がむしろ損

なわれてしまうと思います。

鴻巣 話を聞くうちに、発信力よりも傾聴力なのではないかと思うようになりました。全員が楽しめるものにするには、いろいろな人がいることを理解して、それぞれの言葉に耳を傾けることが必要な気がします。

小俣 同じ行事でも人によって重視する力が違いますよね。役割のある人とならない人では、どの力を身につけることになるのか、さらに変わってくると思います。そもそも僕らは、3年間を通して8つの力をバランスよく身につけるべきなのか、それとも凸凹があつてよいのか……。

滝口 8つの力はこれからの社会で必要なものだから、バランスよく身につけた方がよいと思います。

鶴崎 でも、人によって力を入れること、目指すものは違いますよね。得意な人、苦手な人、楽しみたい人、結果を出したい人……それぞれの違いも尊重し合いたいです。

後藤 各教育活動で身につく力は、無理に2つに絞らないで、どの力をいくつ選ぶかは、個人に選択の余地を残してもよいのかもしれないですね。どの力を選んだかよりも、考えること自体が大切な気がします。

学校行事で身につけた力を日常生活で発揮する

滝口 文化祭や体育祭などの行事の多くは、限られた期間のイベントですよ。だからこそ、そこで学んだことや身につけた力を日常生活でさ

山梨県立吉田高校3年
小俣祥吾
おま・しょうご

山梨県立吉田高校3年
鶴崎新治
つるさき・しんじ

山梨県立吉田高校2年
鴻巣有輝
こうすけ・ゆうき

山梨県立吉田高校2年
後藤大地
ごとう・だいち

山梨県立吉田高校1年
佐藤聡太
さとう・そうた

山梨県立吉田高校1年
滝口理奈
たきぐち・りな



生徒の話し合いを見守る教師たち。「吉高GPの8つの力を、生徒が対話を通して深く考えていたことに驚いた」(高保校長。右)

経験していない学校行事も多い1年生に、2・3年生が各行事の概要を説明しながら話し合いは進んだ。

らに深められるかどうか重要だと思いました。私は今回、応援歌練習を初めて体験しましたが、あの1週間の練習は確かにみんな本気だったけれど、その後の高校総体の壮行会

では声が出ていない人もいました。日常生活で生かされて初めて力が身についたと言えると思うのです。

佐藤 授業や部活動など、毎日あたり前にある活動の中で、行事などですにつけた力をどれだけ意識できるかはすごく大切なことですよね。

鶴崎 行事を単なるイベントに終わらせないために、行事ではあえて自分の弱点である力を意識して伸ばすようにすれば、行事での学びとその後日常生活との結びつきが強くなるような気がします。そして、行事の時は互いに苦手なことにチャレンジしているのだと共通認識を持てれば、みんなで支え合う関係づくりにもつながると思います。

小俣 そのためには、互いの得意や苦手に気づき、それらについて率直に語り合える雰囲気为学校に必要だと思えます。自分が気づいていない長所を人に言ってもらえれば、今自分ができていないことにも自信を持つて向き合えるようになるはずですよ。

滝口 8つの力は、目標として掲げるだけでなく、その意味について常に話し合うことが大切なのだと分かりました。

生徒の対話から教師が学ぶ

学校教育目標を理解する生徒の姿に 新たな指導の可能性を展望する



学校教育目標である吉高GPと授業や学校行事などの教育活動との関連についての生徒たちの議論は、高保校長を含め8人の教師が見守った。およそ1時間の生徒の議論の後、教師たちは教育活動計画の運用について話し合った。

生徒が主体となって 教育活動の意味を考える

高保校長が問題提起したのは、教師が作成した教育活動計画を生徒に提供するかどうかだ。「生徒と教師とでは各活動でどの力が身につくのか、解釈が異なるところもあったが、それは問題ではない。重要なのは、先ほどの生徒たちのように話し合い、自分で考えることだ」と、高保校長は感想を語った上で、「教師

が作成した教育活動計画を生徒に提示することで、生徒から考える機会を奪うのではないか」と問いかけた。

それを受けて教師からは、「2年次になると、学校行事などの内容もよく分かるようになるので、各活動でどの力を身につけるのか、生徒に自分で考えさせてはどうか」という案が提示された。一方で、「教師と生徒の考えが必ずしも一致していないからこそ、教師の思いを伝え、異なる価値観との出会いをつくってあ

図5

吉田高校の教育活動計画の運用方針

1

1年次までは、教育活動ごとに身につけてほしい力を教師が例示したものを渡し、2年次以降は生徒に考えさせるようにする。

2

クラス代表の生徒が学校教育目標について語り合う場面を提供した上で、学年縦断のグループで話し合う。

3

話し合いの内容を踏まえて、生徒一人ひとりが、各教育活動で身につけてほしい力について改めて考え、各自の教育活動計画に反映させる。

*取材を基に編集部で作成



後列左から、舟久保豊先生（1学年主任）、飯室毅先生（進路指導主事）、高保裕樹校長、古屋勇人教頭、小俣義一教頭。

前列左から、東一孝先生（教務主任）、上村泰子先生（2学年主任）、仲條博紀先生（3学年主任）。

山梨県立吉田高校

◎校訓は「百折不撓」「純剛」。新入生を対象にした校歌・応援歌指導、富士登山強歩大会などの伝統行事を持つ。「総合的な学習の時間」の中に「富士山学」を設定し、探究学習を行う。ウエイトリフティング、ラグビーなど部活動も盛ん。

◎設立 1937（昭和12）年

◎形態 全日制・普通科・理数科／共学

◎生徒数 1学年約280人

◎2017年度入試合格実績（現役のみ）

国公立大は、東北大、東京大、一橋大、名古屋大、大阪大などに106人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、明治大、早稲田大などに延べ569人が合格。

◎URL <http://www.yoshidah.kai.ed.jp/>

「したい」という声も上がった。

検討の結果、1年次までは、教師が全項目記入・作成した教育活動計画を生徒に配布するが、その後は、各教育活動で身につける力については、生徒自身に考えさせ、その数も、1つの活動につき原則2つとしながら、最終的には生徒の判断に任せることとした。教師にとって教育活動計画は、学校教育目標と各教育活動の目的を結びつけ、各活動を具体化するために必要だが、同校では教師の考えを基に生徒自身にも考える機会を与えるという方針になったのだ。

生徒たちの議論で教師に特に印

象を残したのが、「学校行事など自身につけた力は、日常生活に生かされなければ意味がない」という言葉だ。それは、高校での学びは社会でも生きるものであることを、生徒が理解していることを証明する言葉だった。そこで、高保校長は「生徒は日常の大切さを強調していた。それならば、私たちは日常の根幹、つまり授業において、8つの力の育成をもっと意識すべきではないか」と、教師たちに問いかけた。それに対して、「文化祭での生徒の設定目標や自己評価を見て、発信力の自己評価が低い生徒が多かったので、自分の授業では発信力を強化できるように

仕かけを意図的に取り入れている」という取り組みが紹介された。それを受けて高保校長は、「吉高GPを軸にした教育活動計画は、教師にとって授業、面談、LHRなどあらゆる教育活動で生徒を刺激するツールとなる」と展望を語った。

教師たちが何度も口にしたのが、「先ほどのような生徒の対話を、全校規模でつくりたい」という言葉だ。そのような思いに至ったのは、教育活動の当事者として生徒が学校教育目標についてそれぞれの思いを語る場をつくることで、日々の教育活動が学校教育目標と強く結びつき、そして、生徒が学校での学びについて

深く考えていることに全教師が気づくことで、教師一人ひとりの生徒への声かけも大きく変わる可能性があるという考えからだ。そこで、夏季休業前に、クラス代表の生徒による8つの力に関する話し合いの進行役を集めた打ち合わせを行った上で、思ったこと、気がついたことを学年縦断のグループで話し合うという新しい取り組みを実施した。

生徒たちの話し合いは、同校の教師たちに、学校教育目標と学校のすべての教育活動を強く結びつけることで、生徒の意識、学びの成果が大きく変わること、そして教師の指導が変わることを実感させたのだ。

●2年生「世界史B」の授業で、単元は「ローマと地中海世界の成長」。この日は、地中海世界を支配したローマ帝国が、領土の急拡大により社会の変質を招き、カエサルが登場につながることを、グループワーク等を通して理解した。（授業デザインはP.21参照）

プリントやメモを基に前時の学習を整理し、1分間で伝え合うペアワークを実施。次にアイスブレイクとしてニュース映像を流し、「おかしいことに気づいた?」と、吉川先生が質問。複数の生徒から、「メルカトル図法にミサイルの射程を書き込むのは変だ」という指摘があった。その後、アバターが本時のテーマを述べる先生自作の動画を流した。

場面をスピーディーに切り替え
生徒とともに授業のリズムをつくり、
思考し続ける状態に導く

世界史は暗記科目という イメージを最初に打ち崩す

吉川先生のアクティブ・ラーニング

吉川先生の世界史の授業は、生徒が世界史に抱く「暗記科目」というイメージを打ち崩すことから始まる。世界史が始まる2年生の冒頭に2時間を使ってガイダンスを行い、世界史の意義や身につく力をじっくりと説明する。

「不透明感が増す時代を生きていくためには

静岡県立掛川西高校

◎「社会に貢献し、未来を切り拓く人間を育てる」を教育目標とし、「鍛えよう若き日を」をスローガンに掲げ、文武両道を実践。野球部は全国高等学校野球選手権大会に出場するなど、部活動も盛ん。

◎設立 1901(明治34)年

◎形態 全日制/普通科・理数科/共学

◎生徒数 1学年約320人

◎2017年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、北海道大、東北大、東京大、京都大、大阪大などに132人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、明治大、早稲田大、同志社大などに延べ853人が合格。

◎URL

<http://www.edu.pref.shizuoka.jp/kakegawanishi-h/home.nsf/>



静岡県立掛川西高校

吉川牧人 きつかわ まきと

教職歴16年。同校に赴任して4年目。

研修課長。ICT推進委員長。

アクティブ・ラーニングの実践は4年目になる。

吉川先生が準備したプリントに沿って、本時のポイントを押さえていく。先生が一方的に話すのではなく、「ここはどう思う？」などと生徒の思考を促しながら必要な知識を確認していった。グループでの話し合いと発表、ペアでの資料の読み聞かせ合い、複数の動画や画像の提示など、次々と場面を切り替えて展開していった。

ローマ帝国の民衆の苦しい生活ぶりが書かれた資料を読み、グループで読み取れたことを話し合って発表。吉川先生が「考えたことを自由に述べて」と投げかけると、多様な考えが共有された。続いて、生徒個々で白地図に書き込みをしながら、ローマ周辺は農業が盛んで、安い農作物の流入が民衆の暮らしを悪化させたことに気づかせた。

場面をスピーディーに切り替え 授業にリズムを生み出す

1年目は知識構成型ジグソー法（*）などのALに取り組んだ。ところが、準備が大変で日常的に行えなかったため、ペアやグループなどの活動で学びを活性化する、「無理のない」授業に行き着いた。

吉川先生の授業は展開の速さが特徴だ。全体に向けて解説していたかと思うと、「ここからはグループで考えて」と話し合いを挟んだり、ペアで資料を読み聞かせ合ったり、頻繁に動画や画像を提示したりと、場面が素早く切り替わる。そのため、生徒には気を緩める暇がない。

「ずっと講義を聞くだけでは、生徒は集中力が

過去から学び、自分の考えを持つことが欠かせません。今後はAIの発達などに伴い、知識より知恵が重視され、思考力や探究力がますます求められるでしょう。そうした力の育成が世界史のねらいだと説明すると、生徒は徐々に世界史の学習へのイメージを改めていきます」

吉川先生がアクティブ・ラーニング（以下、AL）を始めたのは、同校に赴任した4年前。チャレンジを歓迎する校風に刺激され、これからの地歴・公民科のあり方を考えて一念発起した。

「新学習指導要領では『歴史総合』が新設されるなど、地歴・公民科はターニングポイントにあるため、先行的に授業改革を進めています」

続かず、受け身になったり、ほかのことを考え始めたりします。こまめに話し合いの活動などを入れると集中力が途切れず、活動に備えて説明をしつかり聞こうという意識にもなります」

アンケートを実施し、活動の時間配分や進め方などについて生徒の意見を聞き、生徒とともに授業をつくり上げることも大切に行っている。

「生徒が主体的に授業に参加すると、こちらの問いに対する反応が速くなり、テンポのよいやり取りができてリズムが生まれます。そういう空気ができると、生徒は授業に引き込まれて受け身になる暇がなく、常にアクティブに考えている状態になります」

また、ICTの活用もそうした授業に欠かせないという。

「板書や説明の代わりに動画や画像を提示することで効率的に進められ、活動の時間を確保することができます。ALの実践を始めてから、ICTの活用により、授業進度はむしろ速まりました」

思考の活性化・深化への配慮

世界史を日本史や地理と結びつけ 立体的な思考を促す

生徒を主体的にする工夫の1つは、授業のポイントを付箋紙に記入させることだ。生徒は、授業を通してキーワードだと思った語句を付箋紙に書きためていく。授業の最後のペアワーク

* ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」の3つの活動から成る。

本時の学習内容を整理し、ペアで40秒間で伝え合う。「付箋紙に書いたポイントをつなげて説明して」と吉川先生。生徒は、学習内容を頭の中で再構成して自分の言葉で説明した。



今日の授業では4枚の付箋紙に記入しました。自分の言葉で説明するのは難しいですが、学んだ内容を整理でき、「こういうことが理解できた」と実感します。

あらかじめグループごとに設定されたテーマについて、生徒が講義をする時間を毎授業で設定。この日は、1グループが10分間で、少し先の授業に関連するテーマのシルクロードについて講義をした。講義の形態や方法はグループに任せられており、この日のグループは、スマートフォンに準備した資料をプロジェクターで投影し、全員で順番に説明した。



初めは付箋紙に記入するポイントをうまく絞れない生徒もいたが、次第にスムーズに書けるようになる。それに伴い、ペアワークの振り返りでも、学習内容を整理して、スムーズに相手に伝えられるようになっていく。

では、そのキーワードをつなげて文章にし、その日の学習内容を説明し合う。
『今日のポイントはどこだろう』と常に考えるため、授業に対して主体的になります。さらに、最後にポイントを踏まえて自分の言葉で説明すること、理解は一層深まります」
生徒は付箋紙をプリントに貼って保管し、テスト前にはポイントを振り返るために活用しているという。
さらに思考を深化させるため、度々日本史や地理と世界史を融合させて説明する。この日も、ローマの農業が他地域に負けた一因として、地中海性気候について取り上げるなど、地理の要素を確認する場面を設けた。

「日本史や地理と関連づけることで、日本と

の関係や地理的な背景が見えてきます。すると、世界史だけの知識ではなくなり、様々な科目の知識が結びついて立体的に理解でき、生きる上で役立つ思考力につながります」

また、生徒の思考を活性化させる教材開発にも力を入れる。ある授業で、自身が海外で撮影した動画を見せたところ、生徒の反応がよかったため、世界各地を訪れる回数が増えたという。「私が現地で撮影した動画だと伝えると、生徒は一気に身近に感じて関心を高め、質問が飛んできます。自分のイメージとぴったりの教材を作れることもあり、渡航して撮影や資料集めを行っています」

場づくりへの配慮

自分が活躍できる役割を見つげるためのサポート

吉川先生は、世界史は異文化理解や他文化との共生を支える科目だと考えており、そうした力や姿勢を育てるために、授業ではグループでの話し合いを重視している。

「二人ひとりの考えや価値観が異なることに気づき、理解を深めていく経験が、他者を理解する力につながると考えています。一人ひとり違うのだから、必ずしも全員が積極的に前に出て発表する必要はなく、『グループ内で自分が活躍できる役割を探しなさい』と伝えていきます。例えば、発表したり、下調べをしたり、資料を作

授業デザインシート

【教科・科目】地理歴史・世界史

【分野・単元】ローマと地中海世界の成長

【テーマ・作品】ローマ社会の変質と内乱の一世紀

【設定時数】8時間中の3時間目

【本時全体の目標】ローマの混乱がカエサル登場につながることを理解する。

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標 (身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
前時の内容の確認	主体的に知識を定着させる。他者に教えることで知識の定着を図る。	・主体性	生徒はペアで前時の内容を確認し合う。		温かく見守る。
アイスブレイク	仲間と協力して問題を解決する。	・思考力 ・協働性	報道番組の動画を見て、グループで問題点を探す。グループごとに予想する内容をホワイトボードに書き、順番に発表。中学校で学んだ地図の知識に気づかせ、クラス全員で共有する。	報道番組の映像を見せ、おかしいところがないか、生徒に探させる。今回は、メルカトル図法にミサイルの射程を書き込んでいる点がおかしいことに気づかせる。 ※政治・歴史理解に地理的概念も必要となることに気づかせる。	積極的にグループで議論できる雰囲気をつくる。
前時の内容の確認	視覚や聴覚を使ってイメージを膨らませる。	・思考力	動画で前時の内容の復習をする。	今回のメインテーマにつながるようにコメント。	
グループワーク	資料から当時の様子を想像し、共同作業をしながら答えを探していく。積極的にほかのグループに自分たちの見解を伝える。	・思考力 ・表現力 ・協働性	教師による説明を聞き、前方の画面を見ながらプリントに書き込む。それを基に、どのように社会が変わったのかをグループで話し合い、ホワイトボードにまとめて発表をする。	資料を配るだけではなく、ゴールに向けた導きを随時示す。	放置せず、干渉し過ぎずにかかわる。
生徒による講義	自分のグループが担当した課題を的確に他者に伝える。内容、根拠をしっかりと述べ、分かりやすく表現する。	・思考力 ・表現力	長期的に取り組んでいるグループごとの課題の発表。1グループが全員の前で講義をする。	生徒が講義をしやすい雰囲気をつくる。	生徒の説明がなくても、ほかの生徒の聞く雰囲気をつくる。
本時の重要語句の確認	受け身で授業を開くのではなく、自分が講義をするとしたらどの部分が大切かを主体的に思考し、付箋紙にポイントを書き込む。	・思考力 ・主体性	教師から講義を受けた内容の中で、自分が大切だと思ったワードを付箋紙に書き込み、プリントに貼る。		大切なポイントがどこかを説明し過ぎない。
本時の授業のまとめ	学んだ知識をペアワークで相手に教えることで、自らの知識を定着させる。	・思考力 ・表現力 ・主体性 ・協働性	本日取り組んだ内容をペアで教え合い、確認。その際、付箋紙に書いたワードをつなげて、文章にして説明する。	付箋紙で書いたポイントをつなげて説明するように徹底。	生徒の主体性を大切にする。

*吉川先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

成したりと、それぞれが得意な役割を見つけて、チームとして機能させたいと考えています」
人間関係を深めながら、各自が役割を意識して活動できるように、グループのメンバーは年間を通して固定している。

成果と課題

事象の背景を思考するため知識が定着しやすい

授業を重ねるうちに思考力が育っていることは生徒の姿から感じ取れると、吉川先生は言う。
「生徒は常に思考しており、こちらの問いかけに対する反応も速く、『深く考えているな』と感じる発言も増えてきています」

また、A1を始める前と比べ、授業中に扱う知識の量は変わっていないにもかかわらず、定期考査の結果などから定着度が高まっていることを確認している。

「二問一答形式の丸暗記ではなく、歴史的事象の背景を思考しながら理解するため、知識と知識がつながって定着しやすいのだと思います」

今後は授業中の評価を含め、思考力を測定する評価手法を開発することが課題の1つだ。

「SNSなども活用し、生徒との双方向のやり取りを活発にしていきたいです。また、私はファシリテーターとして、思考を促す助言をして、生徒を成長させていけるような存在になりたいと考えています」



授業の最初に「1枚ポートフォリオ」(P.24 参照)に書かれた授業の目的と態度目標を確認した上で、各自その日の授業の目標を設定する。そして、単元に関連することで現時点で知っていること(中学校で履修した内容など)を「1枚ポートフォリオ」に書き出す。その後、溝上先生がKP法(*1)を用いて、この日の学習内容を簡潔に紹介する。

●1年生「生物基礎」の授業で、単元は「体内環境と恒常性」。単元最初の授業であるこの日は、単元に対する生徒の興味・関心を高めるとともに、「恒常性・体液とその成分」の理解を目標に、生徒が活発に意見を出し合いながら、互いの思考を深めた。

対話を重視した学びの中で
知識を整理させながら、
教科の枠を超えた生きる力を養う

溝上先生のアクティブ・ラーニング

学習を「こなす」だけでは
身につかない力を養いたい

溝上広樹先生がアクティブ・ラーニング(以下、AL)の実践を始めるきっかけとなったのは、かつての勤務校の生徒の言葉だった。

「以前の私の授業は講義のみで、生徒に話を聞かせることに注力していました。しかし、卒業を前にしたある生徒が作文で『友人たちは生



熊本県立熊本北高校

溝上広樹 みぞかみ・ひろき

教職歴8年。

同校に赴任して1年目。

アクティブ・ラーニングの実践は5年目になる。

熊本県立熊本北高校

◎「敬愛」「向学」「進取」の校訓の下、「師弟一如」の教育活動を展開。米国モンタナ州の姉妹校との交流や海外研修などを柱としたグローバル人材の育成、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)としての最先端の理数教育など特色ある教育活動に取り組む。

◎設立 1982(昭和57)年

◎形態 全日制/普通科・理数科・英語科/共学

◎生徒数 1学年約360人

◎2017年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、北海道大、筑波大、広島大、九州大、熊本大、鹿児島大などに117人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、西南学院大、福岡大などに延べ389人が合格。

◎URL

<http://sh.higo.ed.jp/kitash/>

*1 紙芝居プレゼンテーション法。公益社団法人日本環境教育フォーラムの川嶋直氏が開発した思考整理とプレゼンテーションの手法。

血球の写真を見て気づいた特徴について、なぜそのような特徴があるのかを教科書を見ないで各自で考え、仮説をワークシートに記入。その後、4人グループになり、発見した特徴と考えた仮説を共有した。溝上先生が生徒に全体への発表を促すと数人の生徒が挙手し、「血小板の形がふぞろいなのは傷口に合わせるため」などの仮説を披露した。

生徒各自が教科書に載っている血球の写真を見て、気づいた特徴を隣同士で共有しながら、単元に対する興味・関心を深めていく。これは、絵や写真、グラフなどのビジュアルテキストの読み解きを手がかりに内容を深く理解していく「看図アプローチ」という手法で、溝上先生がよく活用する教授法の1つ。生徒の話し合いの間、先生は机間巡視を続ける。

教師の説明は可能な限り少なくし、生徒同士での学びを成立させる

授業では、気づいたことや感じたことを生徒同士が対話し、そこでの気づきを手がかりに各自が思考を深めていく。この日は、「体液とその循環」について、教科書の写真や図を題材に話し合いが行われたが、「気づいたことは何でも話そう」「いろいろな意見を混ぜ合わせて考えよう」という先生の言葉を受け止めた生徒は、「リンパ管と血管がいったん分かれて、また合流するのはなぜか」「リンパ管に弁がついているのはなぜか」など、話し合いの中で自分の疑問をあぶり出し、仲間や溝上先生に問いかけていった。

「ほかの人が気づかないような疑問に価値があると理解すると、生徒は教科書をよく読み、

図などに隠された疑問点や分かりにくい箇所、私も気づいていない矛盾を指摘し始めます」

この日の授業で溝上先生が単元の内容を解説する場面は、授業の最初と半ばの2回。いずれも、重要語句を書いた紙を黒板に貼りながら、ごく短い時間での解説だ。

「私の解説だけですんなりと理解できなくても構いません。むしろ、丁寧に解説し過ぎると私の解説で分かった気になり、仲間との活動意欲が下がってしまいます。私の解説の時間や黒板に貼る紙は、生徒の協働のスキルが上がれば、もつと少なくなっていくと思います」

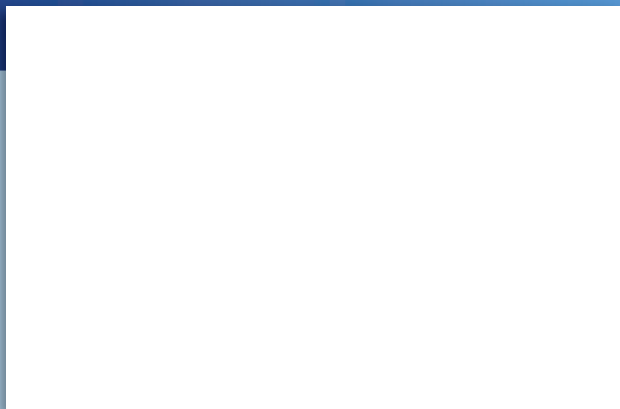
思考の活性化・深化への配慮

「質問づくり」などの思考訓練を少しずつ繰り返す

この日の授業では、教科書の写真を見て気づいたことを基に授業を展開する「看図アプローチ」が、思考を深化させるスイッチの役割を果たす。しかし、目の前の事象を多様な角度から観察し、意味を考えたり、疑問点を整理したりすることは決して容易なことではない。そこで溝上先生は、授業の中でも折に触れて、思考の深め方を生徒が自覚できる思考訓練を少しずつ取り入れている。

「その1つが『質問づくり』です。例えば先日、遺伝を学んだ際には、単元の最初に『DNAの遺伝情報とデジタル情報は似ている』というテ-

10:26 内容の共有と振り返り



教科書の内容整理をグループの4人で分担。1人ずつグループのメンバーに対して重要事項の説明を行う。授業の最後に、この日の成果や反省を「1枚ポートフォリオ」に記す。



生徒の
声

「生物基礎」は仲間同士で話し合う時間が多いので、授業内容が頭に残りやすいですし、重要なことが押さえられます。

10:11 教科書で仮説を検証する



生徒各自がワークシート（写真）に書いた血球の特徴とそれに対する仮説が正しかったかどうかを、教科書の内容と照らし合わせて検証していく。その後、ペアで検証の結果を共有する。溝上先生は、机間巡視で把握した、生徒が発見した血球の特徴と仮説のうち、重要なものを口頭で挙げ、教科書の該当箇所を示すことで全員への理解を図った。

マを提示し、そこから思い浮かぶ質問をたくさんつくる活動を行いました。『どんなところが似ているのか』といった単純なものから、『デジタル情報ってどんなもの？』といった少し単元から外れたものまで、たくさん質問をみんなのでつくり、その質問を適宜取り上げながら授業を進めていきました。生徒はどんな質問によって学習が深まるかを体験し、ものの見方、考え方を習得していきます」

「質問づくり」を繰り返すうちに、生徒は「その質問は深い！」など、互いを評価し合うようになるといいます。

場づくりへの配慮

協働の方法と成果を体感できる時間を授業に盛り込む

生徒が率直に話し合うためには、安心して意見交換ができるグラウンドルールが必要だ。「1枚ポートフォリオ」でも「耳と目と心でしっかりと聞く」「自分や他人を尊重する」といった具体的な態度目標が掲げられている。

「しかし、グラウンドルールは提示するだけではなかなか浸透しません。特に相手の意見を聞くことについては一定の訓練が必要です。先入観を排除して聞くとはどういうことかを説明し、

■生徒の学びの成果と変化を蓄積する「1枚ポートフォリオ」

単元ごとに配布する「1枚ポートフォリオ」。片面には、授業ごとに協働学習への取り組みを自己評価し、授業に対する要望や意見を書く。もう片面には、授業ごとの要点や疑問を書き、単元を通した自分の学びの成果を俯瞰する。

授業デザインシート

【教科・科目】生物基礎

【分野・単元】体内環境と恒常性

【テーマ・作品】恒常性・体液とその成分

【設定時数】4時間中の1時間目

【本時全体の目標】生物の体内環境が一定に保たれていること、体内環境とは体液の環境であることが分かる。

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標 (身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
目的・目標の確認と個別の目標設定	• 前回の活動を振り返り、仲間を意識する態度 • 個別の目標設定を行う力	• 技能 • 主体性 • 協働性	前回の活動を振り返り、場づくりも意識しつつ個別の活動目標を設定する。	クラス全体の目的、目標を確認した後、個別の目標設定を促す。 「どのような雰囲気が進めたいですか?そのために何をしますか?」	より具体的な行動目標となるように伝える。
恒常性・体液とその成分について解説	• 概要を把握し、次の活動のための枠組みを作る力	• 知識 • 思考力	解説を聞きながら、概要を捉えるとともに、次の活動のための準備をする。KP法(紙芝居プレゼンテーション法)を用いて、恒常性・体液とその成分について柱となる部分を短時間で解説する。	「安定した生活に必要なことは?」	活動時間の確保及び次の活動を阻害しないよう、必要最低限の解説に留める。
血球の写真を利用した看图アプローチ	• 疑問を持ち、主体的に学んでいく力 • 図や写真をしっかりと見て、気づく力 • 多様な意見を受け入れ、関連づける力	• 知識 • 思考力 • 判断力 • 表現力 • 主体性 • 多様性 • 協働性	写真をよく見て、赤血球、白血球、血小板の特徴を自らの言葉で表現する。ペアで意見交換をしながら、教科書の記述と気づきを関連づけていく。	「写っているものの特徴は?」 「なぜそのような形態なのでしょう?」	形態的特徴と機能が関連していることに気づくようにする。
恒常性・体液とその成分についてジグソー法で学び合う	• 教科書を読み取り、相手に伝える力 • 相手の説明を傾聴する力 • グループで疑問を共有し、学び合う力	• 知識 • 技能 • 思考力 • 判断力 • 表現力 • 主体性 • 多様性 • 協働性	4人グループで、恒常性・体液とその成分を分担し、担当箇所を読み解き、相手に伝える。しっかりと傾聴する中で、必要に応じて確認や質問を行いながら、理解を深められるようにする。	傾聴をし、疑問がある場合には、質問し合い理解を深めるよう促す。「自分の学びが相手の学びになります」	生徒の様子を観察しながら、エキスパート活動を省略するかどうかを見極める。
リフレクション	• 学習内容を振り返り、整理する力 • 学習内容を関連づける力 • 学習過程を振り返り、客観視する力	• 知識 • 技能 • 思考力 • 表現力 • 主体性	学習内容と活動を「1枚ポートフォリオ」の表裏両面に記録する。気づいたことや疑問、既知の知識や自分自身と関連づけながら考える。自らの学習活動が目標と照らし合わせ、次回の目標へつなげる。	「しっかりと量を書けるようにしましょう。図や絵を使ってもよいです」	学習過程の振り返りでは、具体的な場面を振り返るよう促す。

*溝上先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

成果と課題

協働学習の中での学びの個別化を追究したい

生徒主体の授業展開になったことで、教師である自分自身が、生徒の発想を楽しめるようになったと溝上先生は語る。

「授業の進め方を研究し、改善するのも楽しいです。生徒に合った進め方ができた時は、生徒が授業の中でどんどん変わっていくのが分かるので、大きなやりがいになっています」

大学進学を目指す生徒も多い同校に赴任し、授業方法を見直す中で、次のテーマも明確になったという。

「A1での学びの個別化を進め、生徒が自分の習熟度やペース、方法で個々に学びを深める場面を授業の中にもっと組み込みたいです。仲間がいて、教科書があれば、自分が望むままに学習が進められる生徒を育てるのが目標です」

傾聴することで自分の中に自然と質問が湧くような体験を授業中にさせることがあります」

また、「1枚ポートフォリオ」では、その日の授業についての感想、要望を生徒に書かせ、授業後に必ず溝上先生が目を通すようにしている。生徒に「先生はよりよい授業方法を模索している」「授業は自分たちと先生が一緒につくるものだ」という意識を醸成することも、主体的な授業参加へとつながっているようだ。

東京都立小平西高校
こだいらにし

進路指導・学習習慣の確立

「私はできる」をスローガンに、 何事にも積極的に挑戦する 学習集団を育成

変革のステップ

背景と課題

- 大学進学希望者の増加に伴い、進路指導と学習指導を強化するため、全体方針「小西スタイル」を整理
- 学年ごとに見られた進路の取り組みの違いや、家庭学習時間の伸び悩みの解消を図った

実践内容

- **3年間の進路指導計画を作成** 生徒の多様な進路希望に一層きめ細かく応じるべく、進路部主導で3年間の進路指導計画を体系化した
- **学びに向かう環境の整備** 空き教室や図書室を自習室として生徒に開放するなど、学習習慣の定着に向けた支援を拡充

成果と展望

- 大学進学実績が向上
- 高校の魅力が地域に伝わり、入学希望者が増加

全校体制での指導改善に向け、「小西スタイル」で方針を共有

東京都立小平西高校は、学習や行事、部活動などに全力で取り組む生徒が多く、活気にあふれた学校だ。多様な進路希望に応じた指導などによって進学実績を伸ばしているが、以前は生徒の生活態度に課題が見られ、地域からの声も厳しいものがあつたという。

同校が変わる原動力となったのは、2006年度に策定した指導改善の全体方針「小西スタイル」だ。「私はできる」というスローガンの下、全教師が一人となって生徒の自己効力感の向上を目指し、生徒指導を始めとするあらゆる教育活動の改善を推進していった（本誌08年度2月

PROFILE



教育目標は「創造・協調・健康」。「小西スタイル」として指導の重点を4つの領域から整理し、生徒一人ひとりが「私はできる」という思いを持てる、魅力と活力のある学校を目指している。部活動や特別活動の指導にも力を注いでいる。

設立 1976（昭和51）年

形態 全日制／普通科／共学

生徒数 1学年約280人

2017年度進路実績（現役のみ） 私立大は、亜細亜大、駒澤大、専修大、中央大、東洋大、日本大などに延べ126人が合格。短大、専門学校進学116人。就職25人。

住所 〒187-0032 東京都小平市小川町1-502-95

電話 042-345-1411

Web site <http://www.kodairanishi-h.metro.tokyo.jp>

号P.26～29を参照)。

15年度頃からは、大学進学希望者の増加に伴い、生徒の進路意識の向上と学習習慣の確立に一層力を入れることにした。その際、「小西スタイル」のスローガン「私はできる」を実現する4つの柱として、「学習指導」「進路指導」「生



高野 学 たかの・まなぶ
東京都立小平西高校校長
教職歴33年。同校に赴任して1年目。「人を思いやる心を育てる」



喜入 克 きいれ・かつみ
東京都立小平西高校副校長
教職歴29年。同校に赴任して3年目。「ぶれない、くじけない、諦めない」



伊藤 由紀 いとう・ゆき
東京都立小平西高校
教職歴37年。同校に赴任して8年目。進路部主任。「高校時代の学びを通して社会人基礎力を身につけさせたい」



大石 洋子 おおいし・ようこ
東京都立小平西高校
教職歴10年。同校に赴任して6年目。3学年進路担当。「教師が謙虚に学び、成長し続ける姿こそが、生徒の信頼とやる気をもたらす」



小和田あかね こわだ・あかね
東京都立小平西高校
教職歴25年。同校に赴任して3年目。2学年進路担当。「やればできる!」という生徒のやる気を引き出す」



鈴木 淳子 すずき・じゅんこ
東京都立小平西高校
教職歴27年。同校に赴任して2年目。1学年担任。「分かった!」「できた!」をたくさん体験させたい」

活指導」「部活動・行事」に整理した(図1)。
喜入克副校長は次のように語る。

「指導改善の成果が形として表れてきたため、生徒の実態の変化に応じて取り組みを前に進めたいと考えました。そこで、学習指導・進路指導のさらなる充実に向け、先生方との目線合わせを図りました」

多様なガイダンスを検討・精選し、3年間の進路指導を体系化

進路部では、3年間を見通した新たな進路指導計画を作成した。基本方針は全校で共有していたが、学年によって異なる取り組みが少なくなかったため、より体系的なものを目指そうと考えた。また、大学や短大、専門学校への進学、就職といった、生徒の進路希望に応じて行う多様なガイダンスについて、それぞれの時期やねらいを改めて検討し、精選したいという思いもあった。

ガイダンスを見直す過程で、生徒の進路決定が遅れがちであるという課題が浮かび上がった。3年生になってから進路を決める生徒が多く、一般入試での大学受験を決めても、基礎学力に課題があるケースが見られた。そこで、将来への意識づけの早期化を図ろうと、1年生2学期には卒業後を考えるガイダンスを設け、2年生2学期には進路希望ごとに、今後必要とされる学習の内容や方法などを学ぶガイダンスを新設した(P.28図2)。

また、2年生3学期には、志望大学に進学した卒業生を講師として招き、合格体験を語ってもらい取り組みを追加した。進路部主任の伊藤由紀先生はこう述べる。

「同じ学校で同じように学び、努力して目標を達成した先輩の話を直接聞けば、生徒は刺激を受け、『自分にもできる』という思いが強くなると考えました。大学進学希望者だ

図1 「小西スタイル」のスローガンと4つの柱の概念図

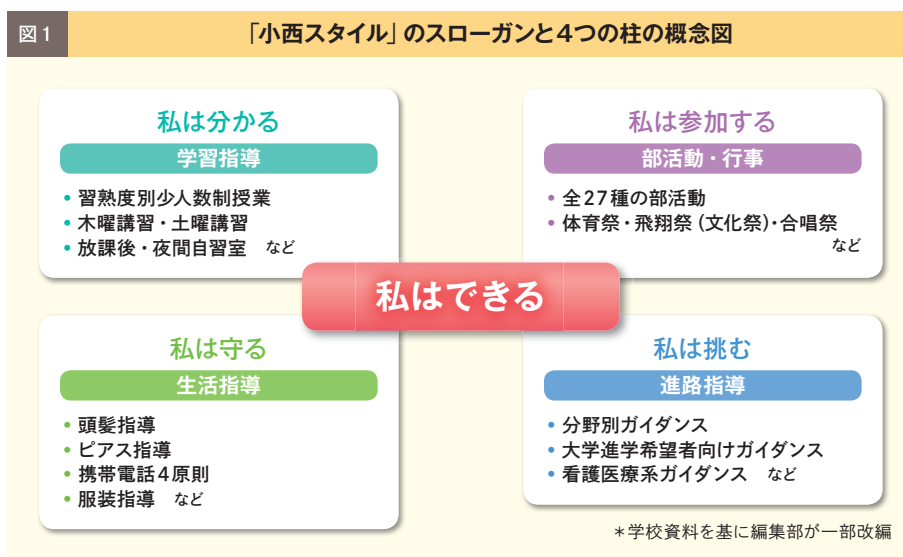


図2 3年間で進路ガイダンス(例)			
時期		ガイダンス名	目的
1年生	2学期	パネルディスカッション	卒業後の進路への動機づけ
	3学期	職業別ガイダンス	職業理解、労働への動機づけ
2年生	1学期	模擬授業	卒業後の進路への動機づけ
	夏季休業	学校見学	進路意識の向上
	2学期	分野別ガイダンス	選択科目決定へのアドバイス
		大学進学希望者向けガイダンス	学習への動機づけ
3年生	1学期	志望理由書事前指導	志望校決定の動機づけ
		学校別ガイダンス	
		大学進学希望者向けガイダンス	
		志望理由書解説	推薦・AO入試対策

*学校資料を基に編集部が一部改編

けでなく、2年生全員の参加としました」生徒の進路意識の向上に向け、アセスメントや模試の活用も強化した。例えば、ベネッセの「スタディーサポート」を全学年で行い、その結果を個別面談などでのアドバイスに生かすことにした。2学年進路担当の小和田あかね先生は次のように語る。

「定期考査などの校内の評価だけで満足しては、いわゆる井の中の蛙になりかねません。また、高校入試がそうだったからか、大学入試も3年生の最後に少し頑張れば何とかなると誤解している生徒もいます。全国レ

ベルでの自分の学力や成長を定期的に把握できるようにすることで、目標を高く持ち、『もっと頑張ろう』という意欲を引き出したいと考えました」

以前はベネッセの「進研模試」を希望者のみ受験していたが、17年度より1・2年生7月の回は全員受験としている。さらに、3年生6月の回の受験者は、12年度には13人だったが、17年度には約130人になり、一般入試での合格を目指す生徒の増加がうかがえる。

各種検定試験への挑戦も奨励し、合格者は全校集会で表彰することにした。また、大学入試の柱となる英語の学習に早期に取り組ませるというねらいもあり、ベネッセの「GTEC」も1・2年生は全員受験としている。

「生徒には、高いハードルを努力で乗り越える経験を積み、自信を高めてほしいと思っています。そうすれば、『私はできる』を生徒一人ひとりが実感し、何事にも前向きに取り組む集団になっていくと期待しています」(伊藤先生)

そのように、3年間の進路指導の流れや各時期の取り組みの目的などをより明確にする一方、学年独自の取り組みも重視している。

「先生方には、目の前の生徒にに応じて指導を絶えず工夫してほしいと伝えています。優れた試みが新たに行われれば、他学年とも共有し、学校全体に根づかせていきたいと考えています」(伊藤先生)

校内の学習スペースを拡充し、学びに向かう集団づくりを強化

学習習慣の確立を目指し、取り組みの発展・改善を進めている。その1つが、校内の学習環境の整備だ。家庭学習時間が伸び悩んでいたため、「それなら学校で学ばせよう」と、空き教室や図書室などを自習室として開放することにした(写真)。当初は週2日間の設置だったが、現在では常設している。教師が生徒の質問に答えたり、学習の進め方などを個別にアドバイスしたりする姿も多く見られる。自習室は、学びに向かう生徒の集団が形成される場となると、1学年担任の鈴木淳子先生は述べる。

「全学年が同室で学習するため、上級生が下級生に教えるといった、学年を超えた交流

写真 自習室は、平日は毎日終業時～19時まで開設している。部活動を終えてから自習室を訪れ、授業の予習・復習をして帰宅する生徒も多い。定期考査が近づくと、利用者は増えていく。生徒は分からないところがあればすぐに教師に質問し、その場で疑問を解消する。

も生まれます。また、上級生が真剣に机に向かう姿を見て、下級生は『自分も受験に向けて勉強しなければならない』と、気を引き締めるようです」

職員室前の廊下にもテーブルを設置し、自習スペースとした。3学年進路担当の大石洋子先生は、次のように話す。

「本校の生徒は、学習への不安からか、教師に寄り添ってほしいという思いが強いと感じます。そこで、『どの先生にも気軽に質問してほしい』と呼びかけ、夏季休業期間には、対応できる教師の一覧表を職員室前のホワイトボードに書くなど工夫しています」

毎回の定期考査では、1週間前から学習計画を立てるよう指導している。専用のカードに各教科・科目の目標点数と必要な学習時間、学習内容などを記入し、試験後には実際の点数と反省点などを追記する。担任はカードを回収し、コメントを書いて返却する。1年生1学期の中間考査では、何を書けばよいか戸惑う生徒が見られるが、次第に計画的に学習し、しっかり振り返られるようになるという。

「担任から見通しの甘さや時間の使い方の課題などをこまめに指摘されることで、生徒はうまく計画が立てられるようになっていきます。そうした指導を3年間継続すれば、自学習の習慣がすっかり身につくと考えています」(伊藤先生)

生徒の課題に応じた指導を目指し、習熟度別

の少人数制授業や課外学習なども積極的に取り入れている。例えば、英語では、1年生が文法を学ぶ「土曜講習」、2・3年生が長文読解を学ぶ「木曜講習」などを、それぞれ希望者に向けて行っている。講習は、外部講師と提携して行われ、土曜講習の参加者は今年、104人になっている。

「私ができる」の下、全校体制で指導改善を継続していきたい

進路指導と学習習慣の確立の両面から推進した改革の成果は、生徒の姿に表れている。17年度からは、同校の課題の1つである家庭学習時間の少なさへの対策として1・2年生で週末課題を導入しているが、しっかりと取り組む生徒が多く、今後どのように自主的な家庭学習へつなげていくかを検討中だ。さらに、大学進学者数は、14年度入試では88人だったが、17年度入試では126人となった。自分の可能性に気づく生徒が増加したからこその変化と言えるだろう。

教師は、学習面だけでなく、行事などの様々な面からも生徒の成長を捉えている。例えば、生徒自身が面白いと感じる文化祭の企画が増え、校外からの来場者も目立つようになった。また、体育祭は生徒に任せて安心して見守ることができている。

「生徒は何事にもやる気があり、学習のみならず、部活動や学校行事、日常生活など、

あらゆる場面で生き生きとしています。人間とは、そのように総合的に伸びていくものなのだと思います。生徒を多面的に見取ろうとする『小西スタイル』の考え方も合致していると考えています」(喜入副校長)

地域からの信頼も高まっており、16年度入試の受験倍率は、近年では最高となる1.61倍となった。また、以前は少なかった近隣の中学校からの受験者が増加傾向にある。同校の変化が、地域の生徒や保護者にもすっかり受け入れられていることがうかがえる。「選ばれた学校」となった同校には、新入生の気質に変化が見られる。

「本校の取り組みを理解して入学しており、最初から学習に意識が向いています。『同じくらいのレベルの高校の中では、大学進学実績がよいから』と入学の動機を語る生徒も少なくありません」(喜入副校長)

今後も、生徒の変化に応じて、柔軟な指導体制を構築していきたいと、高野学校長は意気込みを語る。

「本校の教育活動の目的は、『私ができる』という言葉に集約されています。これを出発点とすることで、異なる領域の指導においても、先生方と意識を共有し、足並みをそろえやすくします。教師の異動は公立高校の宿命ですし、入学する生徒も年々変わっていきます。そうした中で、本校のさらなる発展を考えていきたいと思っています」

鹿児島県立川内高校

学力向上・大学入試改革への対応

「教科指導ストーリー」を軸とする指導改善で、生徒の深い学びを追求

変革のステップ

背景と課題

- 地域の人口減少に伴い、生徒間の学力差が広がり始めた。大学進学実績は伸び悩み、教師の指導のノウハウの喪失が切実な課題となっていたため、指導を体系化し、ベテランから次世代へのノウハウの継承を強化したいと考えた
- 生徒が知識を活用する場を増やし、グローバル社会を生き抜く力の基礎の育成を図ろうと考えた

実践内容

- 「教科指導ストーリー」「橋渡し問題」 各教科・科目の単元ごとの時数配分などを一覧化し、指導の目安として活用。また、各教科団がやや発展的な内容も含む大学入試への「橋渡し問題」を作成
- 「^{えのやま}可愛山プロジェクト」 「総合的な学習の時間」の新カリキュラムを策定し、1年次でディベートなど、2・3年次で課題探究に取り組むことにした

成果と展望

- 生徒の学力が向上し、大学進学実績が上昇に転じた
- 教師の連携強化の下、指導が体系化され、新大学入試制度への柔軟な対応も可能な体制整備を推進

生徒の実態の変化に応じ、指導改善に2つの柱を設ける

鹿児島県立川内高校は、同県で2番目に創設された公立普通科高校だ。文武両道を尊ぶ伝統校として、県内各地から入学者を迎え入れているが、地域の人口が減少する一方、入学定員数は変わらないため、学力に課題のある入学者も見られるようになり、学力差が広がり始めた。その影響からか、大学進学実績が伸び悩み傾向にあったため、2015年度から2つの取り組みを柱とし、全校を挙げて指導改善に取り組んでいる。1つめは、教師の指導体系の共有だ。藤崎恭一校長は次のように語る。

「学力に課題がある生徒の増加に直面し、

PROFILE



旧制・鹿児島県尋常中学校第一分校として開校。校訓に「自律・敬愛・剛健」を掲げる。国公立大学に100人以上の合格者を毎年送り出す一方、部活動が盛んで、男子バスケットボール部や漕艇部、書道部などが県内外の大会で活躍している。

設立	1897(明治30)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約320人

2017年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、大阪大、神戸大、九州大、熊本大、宮崎大、鹿児島大などに136人が合格。私立大は、上智大、東海大、明治大、立命館大、関西大などに延べ231人が合格。

住所	〒895-0061 鹿児島県薩摩川内市御陵下町6-3
電話	0996-23-7274

Web site <http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/sendai/>



鹿兒島県立川内高校校長 藤崎恭一 ふじさき きょういち
教職歴36年。同校に赴任して3年目。「『問い』と『解』を自ら考え抜く、人材としての礎をつくりたい」

鹿兒島県立川内高校 伊地知真 いちち・しん
教職歴25年。同校に赴任して6年目。進路指導主任。「未来を担う子どもたちにかかわれることに誇りを持つ」

鹿兒島県立川内高校 鮫島修 さめしま・おさむ
教職歴24年。同校に赴任して2年目。理科主任。3学年担任。「できない理由を探さない。できる方法を考える」

鹿兒島県立川内高校 石神純子 いしがみ・じゅんこ
教職歴22年。同校に赴任して6年目。2学年主任。総合的な学習の時間係。「常に上機嫌であるよう心がける」

鹿兒島県立川内高校 瀬戸口久也 せとぐち・ひさや
教職歴22年。同校に赴任して5年目。国語科主任。2学年担任。「社会で通用する生徒を育てる」

教師の異動に伴う指導のノウハウの喪失が切実さを増していました。そこで、先生方の知恵と経験を統合して指導を体系化し、ベテランから次世代へのノウハウの継承を強化する必要性を感じました。そうすれば、本校入学者の実情に沿った指導が展開され、学力向上につながるという期待がありました」

2つめは、「総合的な学習の時間」の改善だ。以前は職業・学問調べなどが中心だったが、探究的な学習を軸に据えることにした。

「人工知能の開発やグローバル化が進展し、社会変化が加速度的に進む中、身につけた知識を活用する力の重要性は一層高まるでしょう。そこで、生徒が自ら課題を見つけ、答えを探る活動の充実を図りました」（藤崎校長）

指導の流れを可視化し、教科団全体で改善を推進

各教科団では、3年間の指導の目安となる「教科指導ストーリー」（P.32図1）を合議によって作成している。それは、各教科・科目の単元ごとの時数配分、重点補強内容、教科書を終えてからの大学入試対策の指導内容などを一覧化したもので、国語、数学、英語は15年度、理科、地理歴史・公民は16年度に完成させた。以前は教師や学年ごとに授業内容や進度に違いが見られたため、指導内容の統一を図り、教師の目線を合わせたいと考えた。シラバスのような詳細なものではなく、教師の自由な工夫の余地も残したいと、力を注ぐべきポイントを中心に記載している。進路指導主任で英語科の伊地知真先生は、英語科での合議内容を次のように述べる。

「スキット（*1）やプレゼンテーションなどの効果を高められるよう、それらに取り組む目的や時期などを先生方と共有しました。また、コミュニケーションな活動と文法や単語の指導とのバランスや組み合わせ方などについても検討を重ね、形にしてみました」

当初は作成に困惑する教師も見られたため、

各教科主任を中心に粘り強く合意形成を進め、教師の指導裁量を縛るものではないことなどを繰り返し伝えた。また、アクティブ・ラーニングも全教師が授業に取り入れることにし、アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業の見学を促した。すると、前向きになる教師が増えていったと、理科主任の鮫島修先生は話す。

「生徒が生き生きと学ぶ姿を目のあたりにしたことが、自身の授業を見直すきっかけになったのだと思います。教師間の共通理解が進み、足並みがそろっていききました」

教科会議では、以前は同じ学年の担当者同士での意見交換が中心だったが、「教科指導ストーリー」作成後は、全学年の教師が3年間の指導の流れを見通し、一緒に改善点を検討するようになった。そうした中、大学入試改革への対応も最重要課題と位置づけ、現在は生徒の思考力・判断力・表現力の育成を重視して指導改善を進めている。例えば、国語の定期考査や実力テストに小説を用いる際には、素材文に描かれた登場人物の性格や心情などから結末を考え、それを理由とともに記述させるという問題を出している。実際の結末と一致する必要はなく、推測や説明に論理性があるかどうかで採点する。数人の教師がそうした出題を始め、教科会議を通して全学年に浸透していった。国語科主任の瀬戸口久也先生は、次のように語る。

「生徒の学びを深める手立てを教科団全体で共有し、発展させる場ができてきたと感じ

*1 寸劇。会話や発音などの練習として、授業中に行う。

図 1											数学・理系の「教科指導ストーリー」(抜粋)										
学年	学期	月	指導区分	授業時数	授業・教科書	所要時間	朝課外	土曜課外	放課後の活動	重点補強指導の具体策	上位者指導(魁!川高塾等)										
1	1	4	学習習慣養成期	14	I 数と式	18	教科書補強及び演習	教科書補強及び演習		●アクティブ・ラーニングによる指導スタイルに慣れさせる ①対称式変形を完璧にする ②絶対値方程式・不等式 ③2次関数の最大最小の場合分けを得意分野に ④模試演習	●土曜4限+夏冬課外の4限に実施し、題材は入試問題などをベースにする ①対称式の応用 ②2次関数の最大最小の応用その1 ③2次関数の最大最小の応用その2 ④2次方程式の解の分離										
		5		14	I 集合と論証	10															
		6		20	I 2次関数 模試直前演習	23															
		7		15	I データの分析	10															
	2	8	学習習慣完成期	8	A 図形の性質	14	12	4													
		9		14	教科書補強及び演習	教科書補強及び演習	⑤三角比の徹底 (ア) 正弦・余弦定理の基本から応用まで (イ) 三角形の面積公式 (ウ) 内接四角形関連 ⑥模試演習 ⑦反復試行・条件つき確率 ⑧ユークリッドの互除法&1次不定方程式 ⑨県一斉&模試演習	⑤円に内接する多角形の応用 ⑥空間図形の応用 ⑦さいころの目の最大値最小値の確率に関する問題 ⑧確率の応用 ⑨整数解問題													
		10		16					I 図形と計量 模試直前演習	24											
		11		13					A 場合の数と確率	18											
	12	17	A 整数の性質	16																	
	3	1	基礎力養成期	13	模試直前演習	14	教科書補強及び演習	教科書補強及び演習	⑩相加・相乗平均の活用 ⑪高次方程式の基本から応用まで ⑫線形計画法及び領域問題の基本から応用まで ⑬I A I B 橋渡し問題で補強	⑩剰余類分解に関する整数問題											
		2		17	Ⅱ 式と証明 Ⅱ 複素数と方程式 Ⅱ 図形と方程式 I A I B 橋渡し演習	15 26 9															
		2		17	Ⅱ 式と証明 Ⅱ 複素数と方程式 Ⅱ 図形と方程式 I A I B 橋渡し演習	15 26 9															
3		9		I A I B 橋渡し演習	9																
2	3	基礎力熟成期	16	Ⅲ 微分法の応用 模試直前演習	18	教科書補強及び演習	教科書補強及び演習	⑩増減表→極値→凹凸→漸近線→グラフ図示 ⑪微分による不等式の証明などの応用問題 ⑫様々な関数の最大最小&速度・加速度計算 ⑬I A I B 橋渡し問題で補強	⑩(熊本大〜旧帝大編)入試問題												
			22	Ⅲ 積分法	28																
			11	I A I B 橋渡し演習	10																
3	1	基礎力完成期	18	Ⅲ 複素数平面 模試直前演習	20	教科書補強及び演習	教科書補強及び演習	教科書補強及び演習	①面積&体積問題 ②微積分融合の種々の応用問題 ③ド・モアブルの定理&複素数のn乗根 ④複素数の図形問題 ⑤放物線・楕円・双曲線の性質 ⑥極座標に関する種々の問題 ⑦Ⅲ橋渡し問題による定着	①オリジナル・スタンダード題材の入試問題 ②S1・S2講座(※)の入試問題など ③九州大入試問題演習 2次対策問題編集期間											
			18	Ⅲ 平面上の曲線 模試直前演習	20																
			19	Ⅲ 記述対策 (ⅡB型演習)	61																
			16	Ⅲ 記述対策 (ⅡB型演習)	61																
	2	2次力養成期	18	Ⅲ 記述対策 (ⅡB型演習)	62	教科書補強及び演習	教科書補強及び演習	教科書補強及び演習	⑧10月までは記述対策。11月からはマーク演習も加える ⑨センター試験問題集で補強 ⑩講座別演習開始	※ S1は、橋渡し問題学習後の応用講座。S2は、S1講座後の応用講座。											
			20	Ⅲ 記述対策 (ⅡB型演習)	62																
			16	Ⅲ 記述対策 (ⅡB型演習)	62																
			22	Ⅲ 記述対策 (ⅡB型演習)	62																
	3	2次力完成期	22	Ⅲ 記述対策 (ⅡB型演習)	62	教科書補強及び演習	教科書補強及び演習	教科書補強及び演習	⑧10月までは記述対策。11月からはマーク演習も加える ⑨センター試験問題集で補強 ⑩講座別演習開始	※ S1は、橋渡し問題学習後の応用講座。S2は、S1講座後の応用講座。											
			22	Ⅲ 記述対策 (ⅡB型演習)	62																
			22	Ⅲ 記述対策 (ⅡB型演習)	62																
			22	Ⅲ 記述対策 (ⅡB型演習)	62																

1年生4月〜3年生3月まで、各時期に定着を強化すべき内容や、「橋渡し問題」を始めとする使用教材などを明記して指導の流れを可視化し、教師間の目線合わせを図っている。

*学校資料を基に編集部が一部改編

ています。教師同士の交流が活発になり、生徒の思考を深める発問や解説といったノウハウも、ベテランから若手に継承されやすくなっています」

生徒の学力向上を目指し、「橋渡し問題」の活用も進めている。それは、大学入試の過去問題などから良問を精選し、アレンジして出題するプリントで、最初は数学から始まり、他教科・

2・3年次での課題探究に向け、段階的なカリキュラムを策定

「総合的な学習の時間」では、16年度から「可愛山プロジェクト」(※2)という新カリキュラムを導入している。12〜13人の教師が所属する「総合的な学習の時間係」が、先進校の取り組みを参照しながら策定したものだ。1年次では、生徒の視野を広げるため、政治や環境といった社会的なテーマに関する集団討論やディベートを行う。生徒の関心を高めるために、クラス対抗のトーナメント戦なども取り入れている。2・3年次では、生徒一人ひとりが自由にテーマを設定して課題探究に取り組み、答えのない

科目にも広がっていった。教科・科目によっては、最難関国公立大学対策用や国公立大学対策用など、生徒の成績層や志望大学に応じて様々なものを作成している。基本的には3年次の副教材として徐々に分量を増やし、教科書が終わってから主教材とする。一方、1年次から単元のまとめや振り返りに使う教科・科目もある。用いる時期は各教科・科目の「教科指導ストーリー」に記載し、統一を図っている。

「教科書の内容を組み合わせた発展的な問題を通して、大学入試に対応できるレベルにまで生徒の学力を引き上げたいと考えました。授業から入試への架け橋となるよう、生徒の実態に即して難易度などを調整し、毎年更新しています」(伊地知先生)

*2 同校の近くにある可愛山陵(えのみささぎ)にちなんで命名した。可愛山陵は、日本神話に登場する瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)のものとされる陵墓。

問いと向き合う。似たテーマを設定した生徒同士がクラス混合でグループになり、協働して探究を深めていく。随時、小論文やレポートを作成して表現力も養う。そして、3年次では課題探究の研究結果を論文にまとめる。

教師への負担の集中を防ぐ体制の整備にも力を入れ、2年次前半までは担任と副担任のチーム・ティーチングを原則とする一方、課題探究では、学年の全教師が各グループを担当し、生徒の相談にこまめに応じることにした。総合的な学習の時間係の石神純子先生は、こう述べる。

「教師が丸となって取り組むことで、新しい教育活動が学校に定着すると思います。」

大学入試改革に対応するためにも、生徒が知識を活用する練習を積む必要があることを先生方に伝え、協力をお願いしました」

17年度からは、取り組みのさらなる改善を進めている。例えば、上級生の姿を通して下級生への意識づけを強化しようと、文化祭に「可愛山プロジェクト」での取り組みの成果を発表する場を設けた。2年生の代表チームがデイベート、3年生の代表者が課題探究の内容のプレゼンテーションを行う。また、生徒が課題探究の参考図書を選びやすくなるよう、各出版社の新書の目録を2年生の全教室に配備した。そうしたアイデアには、総合的な学習の時間係以外の教師が提案したものも多い。「可愛山プロジェクト」への教師の意識が高まれば、教科指導の質の向上にもつながると、伊地知先生は話す。

「先生方がデイベートや探究的な学習の指導のノウハウを学び、自身の授業に応用することで、一層効果的なアクティブ・ラーニングが実現すると思います。それは、生徒の主体性を引き出し、学びをより深めていく原動力になると考えています」（伊地知先生）

全校体制で指導改善を進め、大学入試改革に備えていきたい

一連の指導改善により生徒の学力は向上し、大学進学実績も伸びている。国公立大学合格者数は14年度入試での112人から年々増加し、17年度入試では136人となった。旧帝大などの難関大学への合格者数も増加傾向にある。

生徒の学習意欲も高まっている。例えば、16年度1年生の「可愛山プロジェクト」では、「遺伝子組み換え食品の販売の是非」をテーマにクラス対抗のデイベートを行ったが、その準備として、放課後に残ったり、休日に登校したりして、練習や打ち合わせを重ねる生徒も少なくなかった。書籍やインターネットでは解消できなかった疑問点を農林水産省に電話で質問するなど、納得がいくまで調べる姿勢も見られた。学年末に生徒に行った自己評価アンケートでは、「自分の考えを論理的に説明する力が身についた」「人と協働して活動することの楽しさを感じた」といった回答が目立った。また、同年度2年生は、人文科学や社会学、工学、医療・保健学といった様々な学問領域からテーマを設定

し、意欲的に課題探究を進めていた。

「生徒はグループによる話し合いの中で、1つのテーマにいくつもの捉え方があることを実感したようです。なるべく多角的に分析したいと、関連する情報の収集に一層力を注いでいました」（石神先生）

大きく実を結びつつある同校の取り組みだが、さらなる発展を目指している。成績上位層の生徒に向けた補習「魁！川高塾」は、以前は3年生のみを対象に行っていたが、17年度からは全学年を対象に行っている。また、生徒が大学で本心に学びたい学問を見つけるきっかけをつくりたいと、課外学習「GOLDEN EGG GS（金曜講座）」を17年度に新設した。これは、全学年から希望者を募り、インターネット配信されている大学の講義などを聴くというものだ。そうした新たな挑戦と従来の指導とを「難関大学合格ストーリー」として体系化し、成績上位層の育成の強化を図りたいと考えている。藤崎校長は、今後の展望についてこう語る。

「本校には、先生方が目標に向かって力を合わせるという文化が根づいています。現在中心となっている教師が異動しても、取り組みは継続し、前に進んでいくと思います。これからも、生徒の希望進路の実現を目指して『教科指導ストーリー』や『可愛山プロジェクト』に改善を重ね、大学入試改革の進展に応じた指導改善を全校体制で進めていきたいと考えています」

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、3年生の2学期に、生徒が目標達成に向けて、自身の学習時間を把握し、戦略を立てるための「学習予定表」について検討する。

9月の学習予定表

9月の学習予定表		月間目標						
		教科別重点目標						
		英語	地理公民					
		数学	理科					
		国語						
日	曜	学校行事	外部模試	家庭学習予定時間	家庭学習目標	達成度	週間目標	達成度
1	金							
2	土							
3	日							
4	月							
5	火							
6	水							
7	木							
8	金							
9	土	体育祭						
10	日							
11	月	代休						
12	火							
13	水							
14	木							
15	金	保護者会						
16	土		ベネッセ模台マーク模試					
17	日		ベネッセ模台マーク模試					
18	月	敬老の日						
19	火							
20	水	校内模試						
21	木	校内模試						
22	金							
23	土	秋分の日						
24	日							
25	月							
26	火							
27	水							
28	木							
29	金							
30	土							

今月の達成目標	次月の継続目標
---------	---------

Before

福岡県立福岡高校
深江一美先生提供

「3年生 2学期
学習予定表」

課題

- 1 受験本番までの限られた時間を意識して、取り組むべき学習の整理がついていない
- 2 学校や塾での学習をこなすことに手いっぱい、自分自身で取り組むべき学習時間の確保ができていない

検討メンバー



ツール提供者

福岡県立福岡高校

深江一美

ふかえ・かずみ



富山県・私立

片山学園中学校・高校

森内梨絵

もりうち・りえ



宮崎県立

延岡星雲高校

柳井健二

やない・けんじ

3年生の9月上旬に体育祭が終わると生徒は受験態勢に入るが、本番まで時間が限られているという意識が低いために、ただ焦るばかりで、時間をうまく使いこなせていないことに課題を感じていた深江先生。生徒は、学校や塾で取り組む受け身の学習が中心だったり、こなすことに手いっぱいになっていたり、自分の課題に応じた学習にあまり手がつけられない。また、「時間がないから」と模試の復習も丁寧でできず、自身の弱点の把握も十分でできない。10月以降、土日の模試が多くなる前に、学習の時間と内容の自己管理が重要であることに気づかせたいと考えている。

受験本番までの時間を意識し、課題に応じた学習に転換を図る

3年生 2学期 学習予定表



活用の流れ

- 1 「月間目標」「達成計画」「実施項目」を記入する
- 2 実施項目の目安時間を参考に、毎日必要な学習時間を考える
- 3 予定通りにできた実施項目には○をつけ、実際の学習時間も記入する
- 4 月末には学習状況を自己評価し、達成度を基に、翌月の予定を立てる

今回の改訂では、受験生の自覚はあっても、受身的な学習に終始している生徒に対して、自己の課題とその克服に向けた学習時間を認識させるためのシートを指した。また、生徒の負担に配慮して、簡単に記入や振り返りができるような書式にすることとなった。「自分に必要な学習は、目標と課題を把握していないと分からない」との認識で一致し、予定を立てる手順は、月間目標とそれに到達するための計画を「得意伸長」「弱点克服」「現状維持」の3観点から考え、すべき学習を洗い出させることとした。その際、「学校や塾

学習の目安時間も入れて、時間の使い方を考えさせる

から与えられた学習も、目標到達の手段として捉えれば、能動的な学習と理解してもよいだろう」と提案があった。目安時間については、初めは各実施項目の目安時間を記した資料を配布したり、教師が事前に目安時間をシートに書いておき、生徒が自分で考えられるようになったら記入させたりしてもよいという意見が出た。また、「目安時間を書く」と、学習内容よりも時間にとらわれやすいのでは」という意見も出たが、今回の目的は学習時間を意識させ、優先順位をつけさせることなので、目安時間は入れておくこととした。検討の結果、目標から逆算して道筋を考えるロードマップと、記録して振り返る要素を併せ持つシートとなった。

検討メンバーの先生に、自身の指導観や自校の生徒特性を踏まえて、ツールの活用方法や留意点などをお話いただきました

「できること」と「できないこと」を認識させたい

福岡県立福岡高校 深江一美 ふかえ・かずみ



本校では、11月末の期末考査が終わるとセンター試験対策に入ります。それまでに自分で学習が進められるような態勢を整えてほしいのですが、高校入試がそうだったためか、大学入試も塾での学習に頼っている生徒が少なくないと感じています。このシートを活用して、自分の課題に応じた学習時間の確保と学習内容の精査を意識させたいです。達成計画を自分で考えられる生徒は、おのずと実施項目も書けると思いますが、目の前の学習に精いっぱいという生徒には、まず月間目標として、生徒が目標としてイメージしやすい模試で目指す偏差値や得点を掲げさせます。次に、その目標達成のためにどの教科でどれだけ得点を上げればよいかを考えさせますが、9月の段階では優先順位を整理しきれないと思うので、模試の結果から実施項目も同時に洗い出させ、「できること」「できないこと」を認識させていきます。これで、模試の復習の質も高められるでしょう。最初は面談などでも指導する必要があると思いますが、受験直前期までには自己管理ができるようになると期待しています。

深江先生プロフィール 教職歴14年。同校に赴任して5年目。進路部国語科。「流されず、恐れず、自分の目で判断できる人を育てたい」
学校プロフィール 全日制／普通科／共学／1学年約400人／2017年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、筑波大、東京大、京都大、大阪大、九州大、九州工業大などに307人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ596人が合格。

学習の自己修正を図らせるツールとして活用

富山県・私立片山学園中学校・高校 森内梨絵 もりうち・リエ



本校では、9月時点で各自の志望校に応じた学習を進めています。が、やるべきことが多いのに時間がないという焦りが出始める頃です。そこでシートの活用を2パターン考えました。2次力強化に重点を置く生徒には、志望校合格に向けて今月強化すべきことを3項目ほど書かせて、何を用いて学習するのかまでを考えさせます。目安時間の達成が目的とならないよう学習時間の記録欄は外し、できたこと・できなかったことを十分に振り返らせ、翌月につなげます。

模試の得点を1点でも上げたい生徒には、弱点把握に活用したいです。特に、この時期に伸び悩む生徒は自己分析が十分でないため、本当に必要な学習ができていない傾向にあります。そこで、模試の成績を振り返り、毎回失点する分野などを実施項目に書き出させて弱点の洗い出しを徹底させます。その上で、優先順位をつけて3〜5つに絞り、後回しにせず取り組めたか確認させ、確実に学力を積み上げていけるような自己点検ツールにしたいと思います。

森内先生プロフィール 教職歴8年。同校に赴任して9年目。進路指導部長。国語科。「生徒の未来と可能性を、生徒とともに探す」

学校プロフィール 全日制／普通科／共学／1学年約100人／2017年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、東京工業大、富山大、金沢大、名古屋大、大阪大、神戸大などに39人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ175人が合格。

学年・教科間で弱点分野の共有も図れるツールに

宮崎県立延岡星雲高校 柳井健二 やない・けんじ



本校では、学校に遅くまで残って自習する生徒が多いため、学習の自己管理は重要なテーマです。そこで、1年次から記録させている家庭学習時間表と、このシートを併用したいと思いました。特に、一般入試の生徒には、各教科・科目の課題を意識させるため、1教科・科目につき不得意分野を3つほど実施項目として書かせます。生徒は模試の帳票を見ただけで自己分析をした気になりやすいので、実際に生徒自身に書かせるのがポイントです。さらに、月間目標を立てる際には「次の模試ではどうなりたい？」と声をかけ、「あと10点上げる」「GTZ（*）をCからBにする」と具体的に挙げさせ、「目標達成にはどんな学習が必要？」と、生徒が実施項目を明確化できるような指導をしたいと思っています。

また、生徒に実施項目や目安時間の例を提示するためには、まず教師が模試の結果を分析しなければなりません。これは、クラスごとの弱点分野の把握や、自身の指導を振り返ることに役立ちます。学年・教科間での課題共有も進められるでしょう。

柳井先生プロフィール 教職歴25年。同校に赴任して9年目。主幹教諭。教務主任。英語科。「活躍できる場を与え、対話を通して導き、生徒一人ひとりに成長や自立を実感させたい」

学校プロフィール 全日制／普通科・フロンティア科／共学／1学年約200人／2017年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、広島大、宮崎大、北九州市立大などに28人が合格。私立大は、明治大、立教大、同志社大などに延べ142人が合格。

改良したいのに、どうすべきか分からない……

指導ツールを募集しています！

「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材で検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①～④をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前に一度、生徒様の情報が削除されているかご確認をお願いいたします

- ①学校名・お名前
- ②分掌・ご教職歴
- ③ツールの内容（目的・活用時期・活用方法）
- ④ツールに対する課題意識、改善要望

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口（0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時～21時）にて承ります。（株）ベネッセコーポレーション CPO（個人情報保護最高責任者）
上記をご承諾くださる方はご送信ください。

* 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標。「S1」～「D3」の15段階がある。



入学当初に教養の重要性を学び、 4年間の学びの「志」を立てる

東京工業大学 「東工大立志プロジェクト」



講堂講義とグループワークを
セットで行い、
自らの考えを深める

同じ話を聴いても、ほかの学生が自分とは全く異なる考えを持つことが新鮮でした。先生の話をそのまま受け入れるのではなく、時には疑問を持ち、仲間と話し合う中で、新たな考えを生み出すことができたのは貴重な体験でした。(浅沼さん)

講義内容をノートにまとめ、
自分なりに捉え直す

講義はメモを取りながら聴き、「ふりかえりノート」に要旨と自分の考えをまとめます。書くことで考えが整理され、グループワークでの議論が深まりました。(浅沼さん)



話し合いのキーワードは紙の円卓
「えんたくん」に書いて、議論を深める

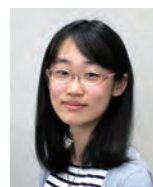
グループワークでは、円形の段ボールを膝に載せ、そこにキーワードを書きながら話を進めていきます。仲間の意見を発展させながら、スムーズに対話を進めることができます。(蛭田さん)

講堂講義では、ジャーナリスト、劇作家、僧侶などが登壇し、「教養とは何か」「現代日本のリーダー像」といったテーマについて深く考えさ

せることをねらいとしている。

東京工業大学では、教養教育と専門教育を織り交ぜながら学修し、知識や能力を育む「くさび型教育」を重視している。その要となる科目が、新入生全員が第1クォーター（4～6月）に履修する「東工大立志プロジェクト」だ。著名な講師による講堂講義と少人数のグループワークをセットで行い、入学当初に自らの学びの道しるべとなる「志」を立てさせることをねらいとしている。

リベラルアーツ教育で
学びの土台を築く



理学院 物理学系
学士課程2年（*）

浅沼遥香

あさぬま・はるか

愛知県立明和高校卒業。
高校時代は物理部に所属し、
物理を学べる理学院に入学。



物質理工学院 材料系
学士課程2年（*）

蛭田彩人

ひるた・あやと

神奈川県立希望ヶ丘高校
卒業。環境問題に関心があ
り、物質理工学院に入学。

*東京工業大学は2016年4月、学部と大学院を統一し、「学院」を創設。1年目は、7つの「類」から1つを選択、2年目にはより詳細な「系」を選択。大学院課程では「コース」を選択する。

せた上で、自分の「志」を模索させる。物質理工学院学士課程2年の蛭田彩人さんが、特に印象に残っているのは、本学の特命教授である池上彰先生の講義だと言う。

「私は、専門的な知識を極めたいと意気込み入学しましたが、池上先生の話を聞き、グローバル社会で活躍するには、教養科目を学ぶことも非常に重要だと分かりました。それ以降、毎週欠かさず本を読むようになりました」

本科目の中にも、課題図書を読んで書評を書き、発表する機会が設けられている。理学院学士課程2年の浅沼遥香さんは、文芸批評家と数学者による対話集を読み、より学びへの姿勢が積極的になったと言う。

「専門分野の異なる2人が、様々なテーマについて深く語り合っていることに驚きました。世界をリードする人材になるには、専門領域だけでなく、広く世界を知ること重要だと分かり、目的意識を持って教養科目を履修したいと思いました」

4人1組での対話を通して 思考する力を鍛える

本科目では、講堂講義でインプッ

トを行うだけでなく、アウトプットも大切にしている。講堂講義後の翌週に行われる少人数のグループワークでは、初回に「ホームグループ」という4人組をつくり、毎回その仲間と講堂講義の要点や感想について話し合い、クラスで発表する。少人数での対話を通して、自らの考えを深める力を鍛えていく。

「時には、『ホームグループ』内で意見がまとまらないこともあります。それが1つの答えだと思うようになりました。対話を通して、自分たちで学びをつくっていく面白さを実感しました」(蛭田さん)

浅沼さんは、対話を通して、多様な視点で物事を考える重要性を学んだと言う。

「哲学者の先生による講堂講義後のグループワークが印象的でした。自分のように高校時代に哲学を学んだことがある人もいれば、哲学を学ぶのは初めてという人もいました。そのため、グループでの対話では、多様な視点から様々な意見が出て、自分が考えもしなかった新しい視点で哲学を捉えることができました。講堂講義の内容はもちろん、自分自身の理解も深まりました」

また、少人数の対話で傾聴・発表を繰り返すことで、コミュニケーションスキルやプレゼンテーションスキルも磨いていく。

人とのつながりで 自らの「志」を成長させる

本科目の最終授業では、クラス全員の前で今後の「志」をプレゼンテーションする。

「私は、『卒業までに本を500冊読む』と宣言しました。読書好きの友人に面白い本を薦めてもらいながら、ジャンルを問わずに本を読み、教養を深めていきたいと思っています。また、この科目を通して自分は人とコミュニケーションを取ることが得意だと分かり、将来は、それを生かせる仕事ができればと考えています」(蛭田さん)

「私は、将来起業したいと思っています。また、学びたい学問は物理なので、志と学びをどうつなげていくのかを模索中です。それも、自分1人で考えるだけでなく、学内の仲間はもちろん、留学をして海外の学生たちとも対話をしながら、自分の進むべき道を見つけていきたいです」(浅沼さん)

大学の思い

学びの姿勢が変わり 授業への積極性が生まれた



リベラルアーツ研究
教育院 教授
山崎太郎
やまざき・たろう

2016年度にスタートした「東工大立志プロジェクト」の一番のねらいは、大学での学びを通してどんな自分になりたいかを考えさせることです。「志」があれば、目的意識を持って学びに取り組みます。

これまででは、教養科目は楽に単位が取れる科目を履修すればよいという学生も見受けられました。私は「オペラへの招待」という教養科目を担当していますが、「東工大立志プロジェクト」を履修した現2年生の授業態度は大変前向きで、大きな手応えを感じています。講堂講義でも、回を追うごとに質問する学生の数が増え、質問内容も鋭いものが多く感じています。

1年目に立てた「志」は、3年目の「教養卒論」という科目で、成果を検証してもらう予定です。1年目の「ホームグループ」の仲間と再び集まり、各自がどんなストーリーを立てて教養科目を履修し、どのように自分を成長させることができたのかを「教養卒論」として文章にまとめ、発表します。私も、2年後に成長した学生と語り合える日が、今から楽しみです。



国内でロンドン大学の国際プログラムを 学び、2つの学位取得を目指す

武蔵大学 経済学部



オールイングリッシュの 授業で、経済学を学ぶ

英語で経済学を学ぶのは難しいと思っていましたが、経済用語などは、日本語よりも英語で学ぶ方が理解しやすいと感じることもありました。(萩原さん)



マンツーマンの英語指導を受け、 学びの土台となる英語力を鍛える

2か月間、セブ島で英語漬けの日々を過ごしました。帰国後はスピーキング力やリスニング力をキープするため、毎日MCV（＊1）に通いました。（萩原さん）

友人と図書館で復習を 行い、理解を深める

確実な授業理解や試験対策のために、友人と図書館で勉強しています。友人からの質問に自分の言葉で説明することで、自分の思考も整理でき、授業の理解も深まります。（鎌田さん）

武蔵大学経済学部では、2015年度から、同大学の学位に加え、ロンドン大学の学位取得を目指す「ロンドン大学と武蔵大学とのパラレル・ディグリー・プログラム」（以下、PDP）を開設している。同大学の履修科目と並行して、国際的に評価の高いロンドン大学のインターナショナルプログラム（以下、IP）を学ぶことで、グローバルに活躍できる人材の育成を目指している。

PDP受講の定員は約35人で、経済学部新入生の中から希望者を募り、英語などの試験を行い選抜する。PDPの1期生で経営学科3年の萩

ロンドン大学の授業に備え、 英語力を強化



経済学部
経営学科3年
萩原綾音
はぎわら あやね
東京都立富士高校卒業。
マーケティングに興味があり、経営学科に入学。



経済学部
経済学科2年
鎌田優樹
かまた ゆうき
東京都立日比谷高校卒業。
得意な数学を生かそうと経済学科に入学。

*1 Musashi Communication Villageの略。武蔵大学内にある、英語を始めとする外国語を楽しみながら学ぶための学習スペース。常駐するネイティブスピーカーのスタッフと、少人数制英会話レッスンやフリートークができる。

原綾音さんは「『英語で経済学を学べる』ことに興味を持ちました」と受講の動機を語る。経済学科2年の鎌田優樹さんは、中学校時代の友人の萩原さんからPDPの話を聞き、同大学への入学を決意したという。

「萩原さんの話から、PDPには、深く思考して自分で答えを導き出していくような授業が多いと感じました。自分の理想とする学びができるのではないかと思います」

PDPでは、授業はもちろん、使用される教材や試験もすべて英語だ。そのため、受講が決まった学生は、1年次の4～5月に英語の強化授業を受け、6～7月はフィリピン・セブ島の語学学校で英語の集中講義を受ける。8月末までにロンドン大学の英語入学基準（*2）を満たせば、9月からのPDPの基礎教育プログラム（以下、IFP）を履修することができる。

論理的思考力が問われるため、予習・復習が必須

IFPを履修した学生は、翌年4月の期末試験に合格すれば、専門課程のIPに進むことができる。1期生20人のうち、IPに進んだのは7

人。IPにも毎年試験があり、3年間で12科目を履修して合格すれば、ロンドン大学の経済学の学士号が取得できる仕組みだ。萩原さんは、IPの授業の様子を次のように話す。

「教授との距離が近く、対話しながら学びを深めていく形式なので、知識を得るだけでなく、論理的思考力も鍛えられています。また、対話を充実させるには、入念な予習・復習が必要なので、休日は家庭学習時間に充てています」

また、試験でも論理的思考力を測るような問題が多く出題される。

「最近の経済動向に関する資料を読み取り設問に答える問題や、経済問題に関して自分の考えを述べるロングエッセーなど、知識を組み合わせて深く思考し、書く問題が大半のため、単に暗記するだけの学習では太刀打ちできません。試験対策の補講に参加したり、過去問題を解き、先生に添削してもらったりしています」（鎌田さん）

学生たちは、留学と同等の高度な英語力に加え、論理的思考力を必要とする授業や試験を受ける中で、授業時間外での自主学習の重要性を実感し、実践している。

パラレル・ディグリーだから授業内容を確実に理解できる

PDPでは、留学とは異なり、経済学に関する日本語の授業と英語の授業を並行して履修できるため、授業内容を確実に理解できる。

「2年次後期に受講するIPの科目『Principles of Accounting』（会計学）に備え、前期に武蔵大学の科目『簿記演習』を履修し、日本語で概要をつかんでおけば、英語での授業理解もスムーズにいくと思います」（鎌田さん）

また、PDPの受講にかかる費用は年間15万円程度で、留学に比べて経済的な負担が少ないのも特徴だ。

PDPでは、留学せずにロンドン大学の学位取得が可能だが、留学の道も開かれている。萩原さんは、3年次後期からIPを導入しているシンガポールのSIM（*3）への長期留学を決めた。

「英語しか通じない環境下で自分の力を試してみたいと思っています。そして、将来は日本にこだわらず、PDPでの学びの成果を評価してくれる企業に就職したいと思っています」（萩原さん）

大学の思い

世界レベルの授業を受け自ら学ぶ力を高めてほしい



経済学部 教授
東郷 賢
とうこう けん

ロンドン大学のIPは、現在、世界180か国以上において採用されており、受講者の中からノーベル賞受賞者も輩出している国際的なプログラムです。試験の作問や採点も現地で、評価は厳格です。この試験で優秀な成績を取めれば、世界基準で「優秀」な人材だと認められ、海外での大学院進学や就職の道も開かれています。

ただ、毎年試験に合格し続けなければ、ロンドン大学の学位は取得できないため、継続的な自主学習が必要です。実際に、学習量の多い学生が結果を出しています。2期生募集の説明会では、ハードな勉強が必要だと話しましたが、1期生の充実した学びに共感する希望者や、PDP受講を目的とした入学者も増えています。また、企業の方からも興味を持っていただき、手応えを感じています。

これからPDP受講を希望する学生に期待したいのは、数学の基礎力です。経済学において、数学的手法を用いた分析は欠かせません。今年度から選抜試験に数学を加え、授業でも数学を強化していきます。

*2 IELTS オーバーオールスコア 5.5 [各項目 5.0] 以上あれば、9月からIFPを履修できる。
*3 Singapore Institute of Management の略。

これからの会議・研修のあり方、つくり方

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師にも、「アクティブ・ラーニング」の視点に基づいた教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる具体策を、現場の声や実践事例を交えて紹介する。

監修 山口 寛

行政、教育機関、地域、企業など、様々な場で対話を促進し、構成員が主体的に課題に取り組む集団づくりを支援するファシリテーターとして活躍。津屋崎ランチ LLP 代表 / LOCAL&DESIGN (株) 代表取締役。

テーマ

思考を深める技術

深まりが乏しい会議・研修によく見られる場面

会議・研修の最中には納得感や満足感を得ていたのに、終了後に振り返ってみると、理解していたと思っていたことが自分の中でうまく言葉にならなかったり、問題解決のための具体的な行動に結びつかなかったりと、思ったほどの成果が得られてい

なかったと失望することは、意外と少なくありません。そうした深まりが乏しい会議・研修にとどまってしまう兆候は、実は会議・研修の中での参加者の発言に既に現れているものです。

合意形成を急いでしまう

多忙な先生方にとって、会議はできるだけ短時間で済ませたいのは当然です。ただ、様々な意見を出し合ったり、従来の取り組みを検証し、見直したりする場面では、合意形成を急ぎすぎると会議後に多くの不満や疑問が噴き出してしまいます。

正論や一般論に安易に流される

参加者の多くが納得する正論が出てきた時、それに対して異論や疑問をぶつけることは容易ではありません。常識を疑い、正論に対して「本当なのか?」「ほかになのか?」と、多角的な視点で考え直す作業を会議の中で省いてはいないでしょうか?

難しい課題に対する思考を止めてしまう

「難しい」「無理だ」と解決策を出すことを簡単に諦めてしまうと、それ以上話すことがなくなり、沈黙が訪れることがあります。私たちは沈黙が苦手で、つい「そういえばこの前……」と主題と関係のない雑談を始めてしまいがちです。しかし、深い思考には、逃げずに考え続ける十分な沈黙の時間が不可欠です。



自校の将来像や求められる教育のあり方も、短時間で答えが出るテーマではありません。そのようなテーマについての話し合いでは、すぐに答えを出すのがよいことではなく、むしろ、答えを保留し、何が起きているのか、なぜそうなったのかを、全員でじっくり掘り下げながら、解決法を考えていくことが重要になります。そこで求められるのは、早く、正確に答えに到達しようとするのではなく、時間をかけて、「そもそも」「どうして」と自らに問いかけながら深く考える態度です。

様々な経験、価値観を持った人たちがアイデアを出し合ったり、思考を深め合ったりすることは、簡単なことではありません。それは、私たちがこれまで、1つの答えや結論を短い時間で正確に出すことに、大きな価値を置いてきたことも影響しているでしょう。しかし、既に社会は変わりつつあり、定型的な作業はコンピューターに素早く処理させる代わりに、私たちには、答えも取り組み方も1つとは限らない課題を深く、じっくりと考えることが求められています。

答えを保留し、現状や原因をじっくり掘り下げる

日々の教育活動の成果の確認と次の課題の洗い出しは、教科指導、学級運営、部活動など、様々な場面で求められます。しかし、反省に重きを置きすぎると、自信、やる気が失われてしまうことがあります。改善点はしっかり確認しながら、教師集団が前向きになれる振り返り方法を取り上げます。

思考を深める技術

司会・進行役が介入すべき「タイミング」

思考が深められる会議にするために、司会・進行役の担う役割は重要です。「深く考えましょう」といった抽象的な呼びかけで終わるのではなく、参加者がおのずと答えを保留し、深く考えるような働きかけが求められます。

会議・研修の前にタグをつける

話し合いのゴール、目標を明確に宣言する

これから始まる会議が、多角的な視野で意見を出し合うことで、いったん拡散させながら個々が考えを深める会議であることを、司会・進行役がスタート時に宣言します。その会議・研修が何をゴール、目標としているのかを明らかにするタグ（荷札）をつけることで、参加者に対して場にふさわしい言動を促します。

会議・研修の間にタグを外す

常識、正論を見直す問いを積極的に投げかける

会議で出された正論が現実とかい離していたとしても、それを参加者同士で批判することは簡単ではありません。目の前の答えに性急に飛びつかせないように、司会・進行役が「本当にそれでよいか?」「ほかにないか?」と考え続けるための問いを投げかける役割を担うことで、参加者の思考のタグを外します。

タグを外すための司会・進行役の問いかけフレーズ

◎司会・進行役は、会議の冒頭に「今日は私から、多角的に考えるための問いかけを意識的に行っていきます」と明言します。その上で、次のような問いを投げかけます。
「なぜ、そうなのでしょう?」「本当にそうなのでしょう?」「本当にそれでよいのでしょうか?」「ほかにもあり得るのではないのでしょうか?」「実際にはどうなりそうでしょうか?」

KEY-POINT

話し合いの規模で、思考の深まりが変わる

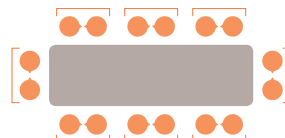
アクティブ・ラーニングでは、「フリーライダー」、すなわち、授業に主体的に参加せず、周りの人たちの活動や、それによってもたらされた成果にただ乗りする人の存在が問題になります。これは会議でも同じことが言えます。特に参加者の

多い会議では、「自分1人が黙っていても影響ない」という考えを参加者が持ちがちです。そのような時は、小グループでの話し合いを時々盛り込むことで、参加者に当事者意識をしっかりと持って話し合いに臨ませることができま



全員で話し合う

◎参加者が多いと、「自分が発言をしなくても、ほかの人が意見を言ってくれる」と思いがち。すると、意見があまり出ずに、会議の深まりが乏しくなってしまいます。



ペアで話し合う

◎ペアであればどの参加者も話さなければならなくなり、当事者意識を持ちやすくなります。その後、ペアワークで出た考えを全体共有する場面をつくとよいでしょう。

問い直し、考えを深めて、常識や思い込みの枠を外す

修学旅行の行き先のアイデア出しをしたとします。「北欧」という提案に、「旅費が高すぎて駄目だ」と結論を下すのは一見もつともですが、実はアイデア出しと評価が混在しています。アイデア出しの時間では、司会・進行役が会議の目的を全員に周知し、結論を保留し、「なぜ、北欧なのか?」について考えを促します。「ほかの場所ではどうか」「生徒は何かができるのか」「それはそこではしか実現しないのか」など、1つの意見を使って新しい問いをつくることも大切です。問い直し、深めるうちに、自分たちを常識や思い込みの枠に閉じ込めていたタグが外れることがあるからです。そのような問いかけも、司会・進行役の重要な役割です。

思考を深めることで、今までとは違う世界を見て、誰も気づいていないことに気づくことができます。じっくりと考えるからこそ、「なるほど、そうか!」と全員でうなずく瞬間に出合うことができるのです。

東京都立日比谷高校

「ゼロからイチを創る」経験を 積みせながら リーダーとしての土台を築く

新学習指導要領や高大接続改革を受けて、資質・能力の育成が改めて重視されている中、世界や日本、地域のリーダーを輩出し続けている学校はどのような考えの下、教育活動を行っているのか。教科学力とともに、思考力や主体性などの汎用的な力の育成を、学校教育の中で意識して行っている、東京都立日比谷高校の取り組みを紹介する。

幅広い科目を履修させ、 学校行事にも力を注ぐ

2001年度に東京都から進学指導重点校の指定を受けて以来、長年にわたって学校改革に取り組んできた東京都立日比谷高校。東京大学合格者数が数名にまで落ち込んでいた低迷期からの脱却を遂げ、近年は超難関国立大学の合格者数において目覚ましい実績を上げている。現在は、「グローバル社会の中で、多様な価値観を持った人々とチームを組んで困難な課題の解決策を見いだし、新たな知を創造していくグローバル・リーダーの育成」を目標に掲げ、教育活動を行っている。武内彰校長は次のように語る。

「高くて丈夫な木は、しっかりと土台があつてこそ育ちます。本校の役割は、生徒が将来、リーダーとして活躍するための土台づくりを行うことにあると考えています」

そのために同校が重視しているのが、「教科学習と学校行事の充実」の追究だ。まず、カリキュラムの特徴は、履修科目数の多さにある。文系・理系いずれの生徒も、地理歴史・公民は「日本史B」「地理B」「世界史B」「倫

理」「政治・経済」の5科目が、理科は「生物基礎」「地学基礎」「物理基礎」「化学基礎」の4科目が必修である。その意図を武内校長はこう説明する。「大学入試に関係する科目だけを選び、学ばせるようなことはしたくありません。本来に大切なのは、生徒を大学に合格させることではなく、その先で活躍できる力をつけさせることです」

この全科目履修型カリキュラムは、幅広い視野を持ち、異なる領域の知識・技能を結びつけながら、新しい価値を紡ぎ出せる力を育むことがねらいだ。

一方、学校行事では、5月の体育大会、6月の合唱祭、9月の星陵祭（文化祭）が3大行事であり、受験を間近に控えた3年生も全員参加する。それらの行事を通して、生徒は、リーダーとしての重要な資質である「他者と協力しながら物事を遂行していく力」や、「主体性を発揮しながら課題を解決していく力」などを身につけていく。

例えば、星陵祭ではクラス単位で演劇を行うのが伝統であり、脚本の選定からキャスティング、演出、セットの製作まで、すべて生徒が自分た



東京都立日比谷高校 校長
武内 彰 たけうち・あきら
教職歴31年。同校に赴任して6年目。「生徒のためにどうすればよいかが最優先である」



東京都立日比谷高校
白田 浩一 うすだ・ひろかず
教職歴34年。同校に赴任して15年目。2学年主任。「生徒の可能性を引き出しその場をつくり運営する」



東京都立日比谷高校
中村 隆道 なかむら・たかみち
教職歴12年。同校に赴任して4年目。英語科主任。グローバル事業部。「限らない可能性を伝える」



東京都立日比谷高校
齋藤 東彦 さいとう・はるお
教職歴34年。同校に赴任して12年目。進路指導部主任。「生徒が可能性を諦めず引き出せる環境をつくる」

東京都立日比谷高校

◎創立130年余りの伝統ある進学校。教育目標に「自立的人格」「学習と教養」「責任と協調」「心身の健康」「文化と平和」を掲げる。「自主・自律」の校風が受け継がれ、国際社会で活躍するリーダーを数多く輩出してきた。2001年度から東京都「進学指導重点校」、07年度から、文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」指定校、15年度から東京都「東京グローバル10」指定校。

◎設立 1878（明治11）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約320人

◎2017年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、北海道大、東北大、お茶の水女子大、東京大、東京医科歯科大、東京工業大、京大などに158人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ716人が合格。

◎URL <http://www.hbiya-h.metro.tokyo.jp>

日比谷高校の3大行事

5月 体育大会

赤青白黄の4つの団に分かれて騎馬戦やリレーなどの熱戦が繰り広げられる体育大会。実行委員は柔剣道大会、球技大会を含めて早くから計画を立て、ビジョンを持って行事を運営していく。

6月 合唱祭

体育大会が終わると、合唱委員会の企画で全クラス参加の合唱祭の準備が進められる。課題曲はなく、クラスごとに選曲。音楽的に深く研究して豊かな歌声を響かせる。

9月 星陵祭

全クラスの演劇と文化部の発表が中心となる星陵祭。演劇の準備は夏休み前の脚本選びに始まり、休み中は稽古や大道具作りに精を出す。観劇には整理券が必要など、毎年大盛況となる。

「自主・自律」と「ゼロからイチを創る力」

同校が重視する次代のリーダーを

ちで考え、準備する。とりわけ3年生は、2年次から3年次への進級時にクラス替えがないため、2年次の星陵祭が終わった時点から、受験勉強との両立を図りながら、翌年の星陵祭に向けた準備を進めていく。そのようにして創り上げられた舞台は、毎年、観る者の心を揺さぶる感動的なものになるという。

育てる教育は、単に全科目履修型カリキュラムなどの仕組みや、学校行事などの場を設定すれば実現するわけではない。2学年主任の白田浩一先生は、「最も大切なのは、本校に根づく哲学」と語る。

「本校には、教師が何かを教え込むのではなく、生徒が自分ですべきことや方法を考え、主体的に物事に取り組んでいく『自主・自律』や、何もないところから自分たちで物事を切り拓いていく『ゼロからイチを創る』ことを尊ぶ校風があります。この校風が、本校の様々な取り組みを

貫く哲学として定着していることが大きいと思います」

「自主・自律」や「ゼロからイチを創る」という言葉は、教師も生徒も合言葉のように共有している。そして、生徒が「自主・自律」を発揮し、「ゼロからイチを創る」機会が学校生活のあらゆる場面で設けられており、生徒は、それらに取り組む中で、リーダーに必要な主体性や、新しい価値を創造する力を鍛え上げていく。

例えば、同校は、文部科学省からはスーパーサイエンスハイスクール（SSH）、東京都からは先導的に国際理解教育を行う都立高校として「東京グローバル10」の指定を受けている。SSHも「東京グローバル10」も、国内外の多彩な分野の専門家を招いた講演会や、生徒が取り組んだ研究や活動に関するプレゼンテーションの機会が数多く設けられている。それらを企画・運営するのは、「SSH生徒委員会」と「東京グローバル10生徒委員会」の委員である生徒たちだ。委員が自分たちで当日の段取りを考え、準備をし、司会進行も務める。学校としては、少々の失敗は織り込み済みであり、失敗を糧に生徒が成長してほしいという思いがある。

SSHの主な活動

全校生徒が対象であり、文系・理系にかかわらず、自主的に希望すれば誰でも参加できる。

・高大連携、産学連携に向けた活動

SSH特別講演会や大学教授による出張授業、研究室訪問・研究体験、企業講演・工場見学、創造性を育む探究的な授業の指導法の開発

・国際化に向けた活動

海外の大学・企業との交流や連携、アメリカ西海岸・ハワイ島海外派遣研修、英語による各種講演会、生徒の英語によるプレゼンテーション

・生徒による課題研究活動の推進

各種研究発表会参加、科学オリンピック・コンテストなどへの積極的な参加

2年生から12人を選抜し、アメリカ海外研修を行う。卒業生のネットワークを活用し、シリコンバレーや国立天文台ハワイ観測所など、海外の最先端を見学する。

「東京グローバル10」の主な活動

・ボストン・ニューヨーク海外派遣研修

マサチューセッツ工科大学やハーバード大学などを訪れ、講義の受講や在学生との交流などを行う。

・ALT及びJETの英語指導員の特別配置

・アスペン研究所・メキシコ大使館・ニュージーランド大使館・東京医科歯科大学など外郭団体との連携

日本やアメリカなどの教授や研究者から直接指導を受け、プレゼンテーションなども行う。

・ハーバードクラブなどの講演会

・ニュージーランドの Columba College、韓国の Michuhol Foreign Language High School との姉妹校提携

2年生から12人を選抜して行われるアメリカ海外派遣研修では、国連本部やハーバード大学などを訪れるとともに、アスペン研究所でプレゼンテーション研修を行っている。

SSHでは、大学と連携しながら課題研究が行われるが、その際も、大学主導ではなく、生徒が自分で興味のあるテーマをゼロから見つけ出し、取り組むことを重視している。

そして、「ゼロからイチを創る」姿勢を具現化しているのは、生徒だけではない。SSHではアメリカ西海岸・ハワイ島海外派遣研修が、「東京グローバル10」ではボストン・ニューヨーク海外派遣研修（それぞれ2年生から12人を選抜して派遣）が毎年行われているが、それらの研修先は、同校の教師が開拓している。英語科

主任で、グローバル事業部部長を務める中村隆道先生は、次のように説明する。

「ボストン・ニューヨーク研修では、世界的なシンクタンクであるアスペン研究所を訪ね、食料問題に関する専門家の前で、生徒がこの問題についてプレゼンテーションを行い、アドバイスをもらう場を設定しています。これが実現したのは、私ともう1人の担当教師が、飛び込みに近い形で研究所を訪問し、こちらの思いを粘り強く伝えることで、相手を動かすことができたからです。教師も

ゼロからイチを創り出していくワクワク感を味わっています」

そうした教師の姿は、生徒にも大いに刺激を与えている。教師が研修先の開拓に苦労している時には、「先生、こうしてみたらどうですか?」と一緒にゼロからイチを創ろうとする生徒も出てくるのだという。

自分で解決したものを1つでも多く増やしていく

進路指導部主任の齋藤東彦先生は、「自主・自律」や「ゼロからイチを創

る」ことを大事にしながら、生徒が物事に取り組んでいく中で、思考力や表現力が鍛えられていくという。教師がいつも生徒に語りかけているのは、「難しい課題に直面した時には、1週間でも2週間でもとこたえなさい。そして、自分の力で解決できたものを1つでも多く増やさない」ということだ。ある分野で考えを突き詰める経験をするとは、ほかの分野に臨む際にもプラスに作用する。

「例えば、私の担当教科は数学ですが、当然、数学が苦手な生徒もいます。本校の生徒には、その苦手な部分を他分野で身につけた『粘り強く考える力』を駆使することで補おうとする姿がよく見られます。だからこそ、生徒には、幅広い科目や様々な学校行事に取り組ませ、どんな場面においても粘り強く考え抜く経験をさせることが大事だと思うのです」（齋藤先生）

多様な経験を積むことは、生徒自身も気づいていなかった自分の可能性を発見する機会にもなる。同校の多くの活動は、生徒同士の協働によって行われる。すると、チームの中である役割を引き受けたり、ほかの生

徒から「○○さんはこういうのが得意だね」と指摘を受けたりする中で、その生徒の隠れた長所が引き出されていくことがある。

そして、もう1つ鍛えられていくのが、表現力である。同校ではSSHや「東京グローバル10」を中心に、生徒が自身の活動や研究を、日本語や英語で発表する機会が多く設定されている。自分がゼロから見つけて取り組んだテーマであるだけに、生徒は少しでも自分の思いを聞き手に伝えようと、入念に準備をして本番に臨む。自然と発表は熱を帯び、深いものになっていく。そうした経験を積む中で、表現力も高まっていくのだ。

指導のあり方について 教師間での共有化を図る

同校が、今後もリーダー育成を目標とする質の高い教育を維持するためには、教師の指導力の向上や、学校全体での意識の共有が必須となる。

「中でも大切なのは、授業の質を上げることです。授業の中で、生徒に考えさせる場面や、仲間の意見を聞きながら自分の意見を発信させる場

面を、いかに多く取り入れられるかによって、生徒の思考力や表現力は大きく違ってきます」(武内校長)

そのため、武内校長は、70数人の全教師の授業観察を年2回行っている。その上で、教師一人ひとりと面談し、授業について助言している。また、指導力の高い教師を3人指名し、その授業をほかの教師に見学してもらい、そこで得た気づきや、同校としての授業のあり方を話し合う場も設けている。

それらの取り組みの結果、生徒に行った授業アンケートにおいて、5年前は60%台だった授業への肯定度が、16年度には80%を超えたという。

教師間の指導体制の一体化という点では、進路指導部も重要な役割を担っている。進路指導のみならず、各学年団や教科団と連携しながら、教科指導のあり方にまで進路指導部がかかわっている。

「進路指導部が学校全体を引っ張る核となることで、生徒の進路実現という目標に向けて、学年も教科も統一感を持って指導にあたることができます。本校はそれができていると自負しています」(齋藤先生)

同校では、進路指導部と3学年団、

前年度卒業学年団が中心となり、全教師が参加する進路指導検討会を春と秋に実施しており、いずれも4月と6月、10月と11月の2回ずつ行う。

1回目は、卒業学年が行った取り組みが模試の成績推移や進路実績にどのように結びついたかを分析し、各学年の課題を出し合う。各学年団の教科担当は、その課題を持ち帰って教科指導の改善策を立て、進路指導部に提出。進路指導部は、その内容で校長に確認を取った上で(その際、見直しを求められることもある)、冊子にまとめる。そして、2回目の検討会で、それぞれの改善策について全教師で議論する。こうした進路指導検討会の議論を経て、教科シラバスを作成している。

「進路指導検討会で出てきた考え方の1つに、『下限』というものがあります。例えば、ベネッセの『進研模試』で言えば、偏差値70だと東京大学はE判定になります。しかし、本校の卒業生の成績の推移を分析した際に、ある時期までは偏差値が70だったとしても、3年生後半の伸びによって合格した生徒が数多くいることが分かりました。そこで、偏差値70を下限として、これを維持することを

目安とした教科指導をしよう」と、教師間の意識の共有化ができています」(齋藤先生)

また、同校では16年度、ベネッセの「GPS Academic(※)」(以下、GPS)を1年生で実施した。17年度も1・2年生での実施を予定している。同校では、模試の結果分析はもちろんのこと、GPSによって、いわゆる「見えない学力」と言われてきた資質・能力も含めて生徒の学力を正確に把握し、教師間でそれを共有化することで、教育の質の向上を図ろうとしている。

「これらの思考力は、2020年度に始まる『大学入学共通テスト』で求められる力であり、これからの社会に求められる力でもあります。昨年度のGPSでは、本校の1年生は相対的に批判的思考力が弱いという結果が出ました。こうした結果を教師間で共有し、授業における探究活動、あるいは行事や部活動を通じて、生徒の批判的、協働的、創造的思考力をどのように高めていくかを考えていくことで、さらなる教育の質の向上を図っていきたいと思います」(武内校長)

* ベネッセ教材の1つで、問題発見・解決に必要な3つの思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力)を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。

岡山県立岡山操山中学校・高校

グローバル・リーダーに必要な 5つの資質・能力を全校で共有、 中高6年間を通じ、全校体制で育む

中高6年間の課題研究を軸に、汎用的な資質・能力を育んできた岡山県立岡山操山中学校・高校は、2015年度に文部科学省「スーパーグローバルハイスクール (SGH)」の指定を受け、その動きを加速させている。

グローバル・リーダーに求められる5つの資質・能力の育成に向けた

「GLOBAL STUDIES」「未来航路」、そして「SOZAN 国際塾」の取り組みを紹介する。

グローバル・リーダーに必要な 精神「和して流れず」を継承

2002年度に県内初の県立中学校を併設し、中高一貫教育をスタートさせた岡山県立岡山操山中学校・高校は、1期生入学とともに、「総合的な学習の時間」を「未来航路プロジェクト」としてスタートさせた。これは、中高6年間で系統的に進める探究型の課題研究で、中学校では体験学習や講演会などで岡山から日本、世界へと視野を広げながら身近な題材で課題研究を行う。そして、高校からは、日本や世界と自分の関心とのつながりを意識しながら各自でテーマを決めて課題研究に取り組む。同校が前身校から受け継ぐ「和して流れず」を軸とした全人教育のために、中高が連続性を持つて行う活動だ。

この取り組みは、生徒の学習意欲の向上などの成果につながり、進路実績も順調に伸びていった。そうした安定期にありながらも、中高一貫校10年目の12年度、次の一手として打ち出したのが「グローバル・リーダーの育成」だ。スーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）推進室主任の金山満彦先生はこう語る。

「『グローバル・リーダーの育成』は、学校が安定しているからこそ、10年目の節目にそれまでの教育活動を見直し、次の10年に向けた本校の教育のあり方を考えようという、当時の校長からの提案でした。グローバル化やIT化が加速し、先行きが不透明な時代が予測される中でどのような人材を育成すべきか、社会でも本格的に考えられ始めた時期でもありました。進学校として社会のリーダーを輩出してきた本校でも、次代のリーダーに必要な資質・能力を明確にし、学校全体で組織的に育む体制を整えようとしたのです」

そこで、各務分掌の主任が集まる「企画経営委員会」や中・高の各代表者による「中高一貫教育推進室会議」を中心に、グローバル人材に求められる資質・能力について検討を重ね、「幅広く深い教養」「課題解決能力」「コミュニケーション能力」「リーダーシップ」「社会貢献の意識」という5つの資質・能力を定めた。そして、それらの育成を目指し、13年度、「SOZANグローバル人材育成プロジェクト」に着手。まず、課題研究の深化を図るため、「未来航路プロジェクト」の名称を「未来航路」と改めた。



岡山県立岡山操山高校
金山満彦 かなやま みつひこ
 教職歴23年。同校に赴任して12年
 目。主幹教諭。SGH推進室主任。



岡山県立岡山操山高校
蟻正聖登 ありまさ きよと
 教職歴36年。同校に赴任して8
 年目。指導教諭。SGH推進室
 GLOBAL STUDIES 担当。



岡山県立岡山操山高校
福島亮一 ふくしま りょういち
 教職歴15年。同校に赴任して9年
 目。SGH推進室未来航路担当。
 進路指導課。



岡山県立岡山操山高校
青山聡 あおやま さとし
 教職歴14年。同校に赴任して7年
 目。SGH推進室SOZAN国際塾
 担当。

岡山県立岡山操山中学校・高校

◎創立110年余りの県を代表する進学校。
 前身の岡山県高等女学校時代からの「和して
 流れず」、岡山県第二岡山中学校の「松柏の精
 神」を継承し、高い学力と豊かな人間性を持っ
 た志の高い生徒の育成を目指す。2002年
 度に県内初の県立中学校を併設し、中高一貫
 教育を開始。05年度入学生から単位制に移行。
 15年度から、文部科学省「スーパーグローバル
 ハイスクール」指定校。

◎設立 1900（明治33）年

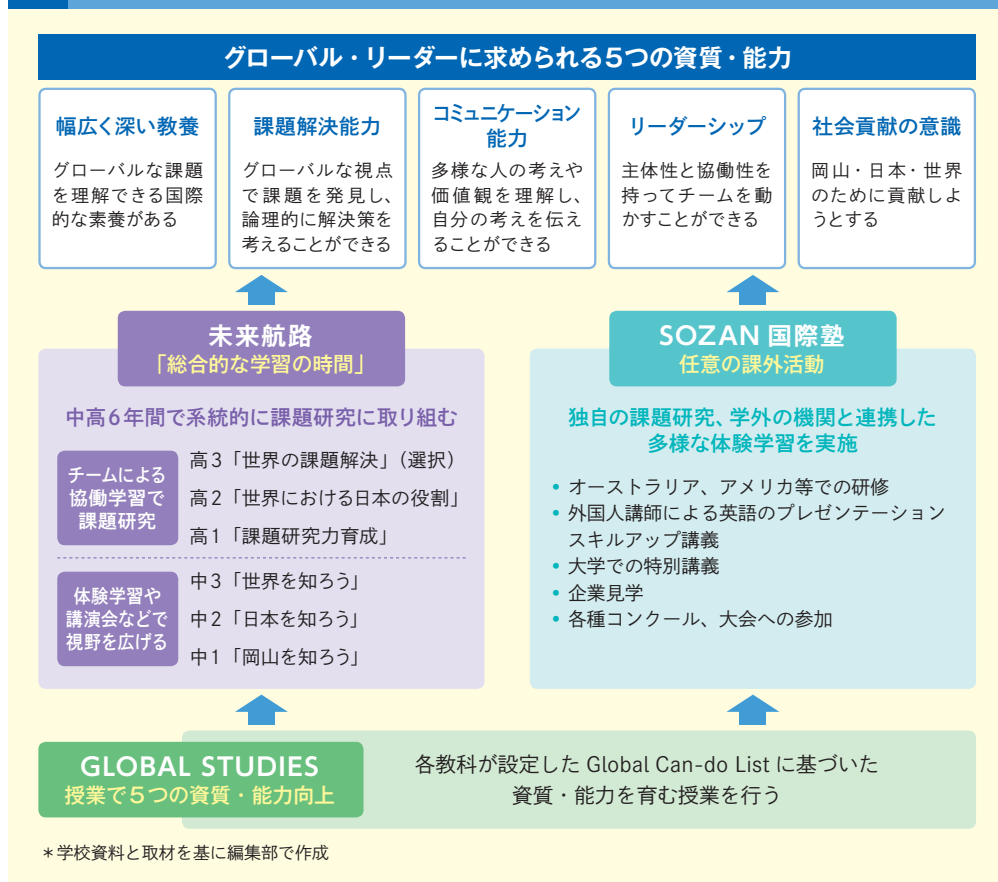
◎形態 全日制／単位制普通科／共学

◎生徒数 1学年約280人

◎2017年度入試合格実績（現浪計）
 国公立大は、北海道大、東京大、京都大、大
 阪大、神戸大、岡山大、九州大などに150
 人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、
 早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関
 西学院大などに延べ374人が合格。

◎URL <http://www.sozan.okayama-c.ed.jp>

図1 岡山操山中学校・高校が育成を目指す5つの資質・能力と達成に向けた主な取り組み



「本校には、課題研究の指導を10年以上行い、課題解決能力を育成してきた実績があります。それを生かし、本校ならではの独自性のある活動を拡充させることで、『未来航路』をグローバル・リーダー育成に向けた教

育活動の核としました」（金山先生）
 さらに、14年度には、「グローバル人材育成推進室」を立ち上げ、「未来航路」「SOZAN国際塾」「GLOBAL STUDIES」を連動させる体制を整えた（図1）。そして、15

年度には、文部科学省「SGH事業」の指定を受けた。

5つの資質・能力を教科指導に落とし込む

同校のグローバル・リーダー育成の軸となる3つの取り組みをそれぞれ見ていこう。

まず土台となるのが、日々の授業の中で5つの資質・能力の育成を目指す「GLOBAL STUDIES」だ。実技教科も含め、全教科でアクティブ・ラーニングを実践し、指導力向上を図るため、各教科、大学教員や岡山県総合教育センターの指導主事に外部講師を依頼している。

また、同校には中・高合わせて130人以上の教師がいる。これだけ人数が多ければ意識の差も生じ、毎年異動もあるため、全校でベクトルをそろえるのは難しい。そこで、16年度に作成したのが「Global Can-do List」だ（P.50図2）。これは、各教科の指導内容や教科特性に応じて、中学1年生～高校3年生の各学年での5つの資質・能力の到達目標を設定したものだ。

到達目標は、中・高合同の各教科

図2 「Global Can-do List」 国語（抜粋）

	幅広く深い教養	課題解決能力	コミュニケーション能力	リーダーシップ	社会貢献の意識
解説	国語による表現や日本文学について正しい知識を身につけており、我が国の国語が中国漢字文化に文化的恩恵を受けつつ独自の発展を遂げ、近代化に際して西洋の文化を柔軟に吸収しながら成立してきたことを理解していること。	先人たちの知識や価値観を学ぶとともに、近現代に関する理解を深める中で、課題を発見し、長期的展望を持ちながら、論理的・科学的手法で解決しようとするができること。	互いの立場や考えを尊重しながら他者とかかわり、言語を通して適切に表現したり的確に理解したりして、円滑に相互伝達・相互理解を進めることができること。	激しく変化する現代社会において、国語を適切に運用して良好な人間関係づくりや健全な社会づくりに積極的にいかかわろうとすることができること。	長い歴史の中で育まれてきた我が国の言語文化を学ぶことを通じて、社会に対する理解を深め、社会の根幹としての国語を継承してよりよく発展させようとしたり、積極的に社会にかかわろうとしたりすることができること。
高校3年	常用漢字の読み書きに習熟するとともに、自身を取り巻く様々な価値観が近代的な知の枠組みに依存して成り立っていることを理解することができる。	様々なジャンルの論評を通じて、前近代、近代、脱近代それぞれの立場や思想に関する理解を深め、課題を巨視的な視点で捉え解決策を探ることができる。	様々な文章や文学作品に関する意見や感想を話し合ったり、文章化して相互に批評し合ったりすることができる。	様々な考え方ができる事柄に関する発表や討論に際して、それぞれの立場を尊重しながら相互の意見交換が円滑に行われるよう取り計らうことができる。	様々な文章や文学作品を学び、意見や感想を文章化する活動を通じて、言論によって社会とつながりを持つことを知ることができる。

* 学校資料を基に編集部で作成

会で検討。教師それぞれで思いや解釈に違いがあり、時間を要したが、教科内での目線合わせだけでなく、教科横断で共通理解を図るために有効なものができた。SGH推進室GLOBAL STUDIES担当の蟻正聖登先生は、そのねらいをこう語る。

「グローバル・リーダーの育成というと起業家や外交官をイメージがちで、自分の授業には関係ないと捉える先生もいました。また、5つの資質・能力について、例えばコミュニケーション・能力といっても、国語科と理科では捉え方が異なります。そこで、日々の授業がグローバル・リーダーの育成という大きな目標につながっていることを意識してもらい、授業改善に結びつけることを目指し、それぞれの資質・能力を育むためには授業の中でどのような指導や視点が必要かを、教科ごとに考えてもらいました。また、各教科で5つの資質・能力の育成を目標とするとは、幅広いグローバル人材の育成にもつながるという思いもありました」

「Global Can-do List」は、教師間だけでなく、年度の初回の授業で生徒にも配布・解説し、理解と浸透を図っている。また、中・

高共通の校内研究のテーマを、16年度は「Global Can-do List」による授業改善」、17年度は「Global Can-do List」の活用と検証方法の研究」とし、実質化を進めている。

「Global Can-do List」は運用し始めたばかりで、これが完成版ではありませんし、生徒の資質・能力の育成に結びつかなければ意味がありません。公開授業などで行っていた学外の方の意見を参考にしながら、改訂を進めていきたいと考えています」（蟻正先生）

答えが1つでない課題の解決策をチームで考える

このように、日々の授業で教科書力とともに5つの資質・能力の土台を築いていき、それを大きく伸ばしていくのが「未来航路」と「SOZAN国際塾」となる。

「未来航路」は、以前は進路学習の側面が強く、志望する学部・学科に結びつく課題研究を生徒個々に行っていたが、5つの資質・能力の育成の観点から刷新した。まず、高校1年生では、身近な題材による研究を

協働活動を多用して進め、課題研究を行うための基礎を培う。そして、高校2年生では、「貧困と飢餓」「紛争と平和」「教育」「健康と疾病」「貿易と開発」「持続可能な開発と環境問題」の6分野から関心のある分野を選ばせ、クラス混合の5～6人でチームを組み、各チームでテーマを決めて課題研究を行うこととした。SGH推進室未来航路担当の福島亮一先生は、次のように説明する。

「チームは教師側で決めています。メンバー全員が初対面ということもありますが、そうした状況から目標に向かってチームで協力していく経験を通して、社会性や忍耐力などの非認知能力の大切さを実感し、身につけていってほしいと考えました」

研究分野の設定にもこだわった。

「社会の課題は、正解が1つではありません。例えば、開発も必要だが、環境保護もしなければならぬというような、最適解を模索していくことが求められます。生徒にそうした課題を投げかけた上で、研究テーマを決めさせ、チームで調べ、議論させます。そして、理想で終わらせず、何よりも実現可能な解決策を考えるよう指導しています」（福島先生）

生徒の声

SOZAN国際塾

研究を深めれば深めるほど、答えが出ない

「SOZAN 国際塾」では、放課後に集まって課題研究を進めるほか、課題研究を英語で発表することもあるため、週2回、外部の英語講師による、プレゼンテーションを意識した英語講座が開かれている。

高校2年生の上野優花さんは、そのレッスンに魅力を感じ、入塾した。

「フィリピン人の先生と話していると、価値観や文化の違いをよく感じます。例えば、私たちが『かわいいそう』と思うものでも、先生にとっては『楽しい、かわいい』という発言があるなど、そうした違いも学ぶことができて興味深いです」

一方、高校2年生の板谷勇飛さんは、塾創立時の中学時代から参加し、課題研究に力を入れてきた。

「持続可能な開発は何かと考えた時に、思い浮かんだのがエコカーでした。しかし、研究を深めれば深めるほど、自分たちの知らないことがたくさん出てきて、今も答えが見つかりません。自分たちができることは何かを改めて考え、アプローチをし直しています」

課題研究では、意見をまとめるのが大変だったと、板谷さんは語る。

「メンバーみんなが深く考え、自分の意見を持っているからこそ、全員が納得するようにまとめる難しさを実感しました」

学外で様々な年齢、職種、立場の人と話す機会が多いことも塾の魅力だと、2人は語った。

学外での体験を多く積み
チャレンジ精神を育む

一方、「SOZAN 国際塾」は、学びを深めた生徒がさらにステップアップできる場を設けようと、14年度にスタートさせた任意参加の課外活動だ。現在、約30人の塾生がいる。生徒の発案により「エネルギー効率のよいエコカーの開発と普及」をテーマにした課題研究を進めるとともに、大学での講義の受講、企業見学、ほ

かのSGH校との合同研究発表会、オーストラリアやアメリカの高校との交流などを行っている。SGH推進室SOZAN 国際塾担当の青山聡先生は活動の意図をこう語る。

「SOZAN 国際塾では、大学や企業の協力をいただき、生徒が自分の研究を学外に発信する機会を数多く設けるようにしています。より難しい課題に取り組み、学外での経験を積むことで、果敢に挑戦する積極的な生徒を育むことがねらいです。実

際、塾での経験を生かし、『未来航路』でリーダーシップを発揮する生徒や、研究発表を英語とする生徒もいます」

活動後には、振り返りシートで、生徒は5つの資質・能力について活動前と比較した自己評価を行う。

「毎回の活動を振り返ることで、自己の成長と課題に自分で気づくメタ認知の能力を育てたいと考えました。自己の気づきが主体的な学びに結びつくと期待しています」（青山先生）

資質・能力を見える化し、
取り組み改善に結びつける

自らの課題意識からグローバルリーダーの育成を図ってきた同校は、SGHの指定を受けたことで、学校全体で資質・能力を育む体制が強化された。突出した指導力がある教師が牽引するのではなく、教師の異動があっても同一の指導が継続可能な体制を築いたことは、新学習指導要領でその重要性がうたわれているカリキュラム・マネジメントの先鞭をつけたといえるだろう。

17年2月に行った高校2年生への意識調査では、5つの資質・能力に関する全24項目中18項目で肯定的な

回答が1年次より増えており、取り組みの成果がうかがえた。さらに、16年度に高校1・2年生が、批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力を測るベネッセの「GPS-Academic」（以下、GPS）を受検したが、結果分析からは同校が育成を目指す「課題解決力」と「コミュニケーション力」が大きく伸びていることが明らかになった。一方で、「社会への参画意識」には課題も見られたため、17年度は企業と連携した取り組みを強化している。

今後の課題は、それらの成果と課題を踏まえつつ、始めて間もない「Global Candido List」を実質化し、3つの取り組みを有機的に結びつけることで生み出される相乗効果により、5つの資質・能力をさらに向上させることだ。

「GPSで資質・能力の到達度が見える化されたことは、生徒に取り組みの成果を実感させるだけでなく、主体的に学ぶ姿勢の高まりにも結びついています。これからも、本校に入塾した生徒が、地域、日本、世界へと羽ばたけるよう、取り組みを深化させていきたいと思います」（金山先生）

滋賀県・私立立命館守山中学校・高校がICT活用の公開授業を開催

ICT活用で、生徒の学び方改革と 教師の授業改善を図る

全国の多くの高校でICTを活用した授業改善が進められている。
2014年度からタブレットを段階的に導入してきた滋賀県・私立立命館守山中学校・高校は、
生徒全員がタブレットを持ち、授業や課外活動、家庭学習など、
学校生活のあらゆる場面で活用している。
タブレットの活用により、教師の指導や生徒の学びはどのように変わったのか。
同校が2017年6月に開催した「ICT公開授業研究会」の様態と併せてレポートする。

**基礎・基本は自学自習で培い、
協働的な学びに注力**

立命館守山中学校・高校では、生徒の資質・能力を高める方策の1つとして、2006年度の開校時からICTの活用を積極的に進めてきた。14年度、校舎内のWi-Fi環境の整備を機に、中学1年生と高校1年生にタブレットを導入。16年度までに生徒全員に行き届かせた。さらに、15年度から高校で、17年度からは中学校においてクラウドサービスによる授業・学習支援教材「Classi」(*)を導入し、自学自習と協働的な学びを軸とした「Ritsumori Style」という学習メソッドの実践を進めている。

「Ritsumori Style」が目指す姿は、家庭学習で基礎学力を身につけ、授業では発展的・協働的な学びを充実させながら、深い学びを実践することだ。ICT推進担当の國領正博先生は次のように語る。

「生徒同士で議論し、思考を深めるためには、基礎学力が欠かせません。しかし、授業の中で知識・技能の理解と定着を促し、協働学習まで行うのは限界があります。そこで、ICTを活

**立命館守山中学校・高校校長
寺田佳司** てらだ けいじ
教職歴31年。同校に赴任して1年目。立命館宇治中学校・高校副校長を経て、現職。

**立命館守山中学校・高校
伊藤久泰** いとう ひさやす
教職歴13年。同校に赴任して4年目。メディア教育部主任。立命館慶祥中学校・高校を経て、現職。

**立命館守山中学校・高校
國領正博** こくりょう まさひろ
教職歴27年。同校に赴任して4年目。ICT推進担当。滋賀県の公立中学校勤務を経て、現職。

**立命館守山中学校・高校
栢野祐介** かの ゆうすけ
教職歴6年。同校に赴任して7年目。進路部主任。

**立命館守山中学校・高校
曾根威志** そね たけし
教職歴12年。同校に赴任して11年目。高校第1学年主任。滋賀県の公立高校勤務を経て、現職。

立命館守山中学校・高校

◎「チャレンジ・チェンジ・クリエイション」の3Cをコンセプトとする教育を展開。平和学習やキャリア教育、ICT活用などで先進的な取り組みを進めている。

◎設立 2006（平成18）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約320人

◎2017年度入試合格実績（現役のみ）

国公立大は、お茶の水女子大、東京大、名古屋大、滋賀医科大、京都大、京都工芸繊維大、大阪大、九州大などに12人が合格。私立大は、自治医科大、慶應義塾大、東京理科大、早稲田大などに15人が合格。ほかに、立命館大、立命館アジア太平洋大に255人が進学。

◎URL <http://www.ritsumei.ac.jp/mrc/>

* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

用した家庭学習で基礎学力の定着を促し、授業では学校でしかできない協働学習や探究学習を行い、授業と家庭学習の相乗効果をねらいました」

家庭学習では、Classiの学習動画とWebドリルを組み合わせて生徒自身のペースで学習できるようにするとともに、学習時間を記録させることで、自己管理能力の育成と家庭学習の質向上を目指す。

「教科の部屋」という校内グループ機能による教え合いは、生徒にとつてなくてはならない学びの場になっている。1人で学習していても、この機能で質問すれば同級生の誰かが解説してくれる（写真1）。これにより、教師は難易度の高い質問への対応や、つまづいている生徒の支援に多くの時間をかけられるようになるなど、指導の変化にもつながった。



写真1 「教科の部屋」は、教科・学年別に設定されている。生徒は自由にアクセスし、先生や友人に質問している。

生徒と保護者への情報伝達と共有が確実かつ効率的に

生徒・保護者・教師の間で、学校生活にかかわる情報の伝達と共有が格段に円滑になったことも、Classiがもたらした大きな変化だ。学年主任の曾根威志先生はこう説明する。

「紛失しがちな配布物をClassiで配信することで、確実に生徒と保護者に情報を届けられるようになりました。進路希望調査や学習意識調査なども、Classiではデータの集計からグラフ化までが自動で行われるため、教師の負担が減りました」

今後は、進路希望調査や模試成績、レポートなどを生徒個々に蓄積するポートフォリオのシステムを整備する予定だ。進路部主任の栢野祐介先生は、次のような期待を寄せる。

「生徒が自身の取り組みや歩みを振り返ることができるようになれば、自分の将来を考えるきっかけとなるだけでなく、担任や学年団が、より生徒個々に合ったアドバイスができるようになるはずです」

ただ、ICTはツールであるだけに、効果的に活用できるかは教師個々の力量に左右されやすい。そこで、

同校では、14年度から「ICT公開授業研究会」を年2回実施し、保護者や他校の教師、教育関係者との交流を行うことで指導力向上を図ってきた。公開する授業は年々増えており、今年は大半の授業を公開した。メディア教育部主任の伊藤久泰先生は、そのねらいをこう語る。

「先生方には、普段通りの授業をしてもらうようにしています。その上で、多くの先生や保護者からご意見をいただくことが授業を見直すきっかけとなり、新たなチャレンジにもつながると考えています」

不易の部分を大切にしつつ最先端の教育を取り入れる

今や学校生活に欠かせないツールとなったタブレットだが、定着までには課題もあった。導入までの準備期間が短かったこともあり、当初は戸惑う教師も多く、生徒や保護者からは必要性を問う声もあった。それでも短期間で定着した大きな要因は、活用のハードルを下げたことにある。

「先生方には活用に際して指導案の提出などを求めず、『まず使ってみよう。失敗してもかまわない』と何度

も伝えました。生徒には、この取り組みが最先端の教育だということを強調し、プライドを持って学習するよう励ましました」（國領先生）

そうした働きかけの結果、教師も生徒も、タブレットは授業改善や学校生活に必要な不可欠なものだという認識を持つようになったという。

ただし、ICTを使うこと自体を目的にしてはいけなく、寺田佳司校長は強調する。

「最も大切なのは生徒の力を伸ばすことであり、そのツールとしてICTを使うという認識でなければ、機械に振り回されてしまうだけです。生徒の学力や人間力を高めるのが教育の使命であるという不易の部分を押さえた上で、時代が求める最先端の教育をどん欲に取り入れていくことが重要だと考えます」

今後の課題は、ICTの活用と学力の関係を明確にしておくことだ。

「ICTは学校の文化として根づきつつあり、今後は生徒が伸びていることを明確にする必要があります。データを積み上げながら、学力が付き、大学や社会で活躍できる力が育っているのかを、真摯に検証していきたいと考えています」（寺田校長）

全国から教員が集まり、学校を超えて、 教育におけるICT活用のノウハウを共有

様々な教科・科目で

ICTの活用方法を公開

17年6月、立命館守山中学校・高校で通算5回目の「ICT公開授業研究会」が行われた。学外からの参加者は年々増加しており、前回の150人に対し、今回は青森県から沖縄県まで211人の学校関係者と、保護者140人が来校した。

今回は、「ICTを活用した協働学習と個に迫る未来型授業の創造を目指して」をテーマに、授業公開に加えて、Classi株式会社の協力の下、先進的な取り組みをする県外の高校3校を招いた分科会も実施した。

午前中は、中・高合わせて約80の公開授業が行われた。倉本先生が担当した高校2年生「物理基礎」の授業では、生徒同士がタブレットを使いながら運動方程式の立て方を話し合う姿が見られた（写真2）。授業を

受けた生徒は、「タブレットを使うと、自分の考えと友人の考えを簡単に比較したり、自分の間違いを客観的に見たりすることが出来ます。倉本先生の授業は、動画も配信されるので予習・復習がしやすく、自分のペースで家庭学習に取り組んでいます」と語る。

曾根先生の高校1年生「音楽」の授業では、ピアノの弾き語りをする

先生の姿を生徒がタブレットで撮影し、その動画を見ながらメロディーラインと声楽パートの関係を生徒同士で考察した（写真3）。

分科会で

学校間・教師間の交流を図る

午後には参加者全員による全体会が開かれた。冒頭の挨拶で、寺田校

写真2 「物理基礎」では、運動方程式の問題を、タブレットに図を描きながら考えた。互いに自分が描いた図を見せながら、話し合う姿が見られた。

写真3 曾根先生の引くピアノの弾き語りをタブレットで撮影する生徒たち。この後、生徒は小グループになり、動画を見ながらメロディーの構成について話し合った。

長が不易と流行を踏まえた改革の重要性を強調。「ICTは導入して終わりではなく、ツールとしてどのように指導に使い、その成果をどう評価するのかまでを考えなければならぬ」と呼びかけた。続いて、教育におけるICTの可能性について、Classi株式会社の代表による講演が行われた。

その後、テーマ別の分科会が開かれ（図）、授業やその他の指導場面におけるICT活用についてノウハウの共有が進められた。Classiを導入したばかりという鳥取県立鳥取湖陵高校の森本研吾先生は、「授業や進路指導におけるClassiの活用について学びにきました。公開授業で、生徒が自然にタブレットを

写真4 東百舌鳥高校の分科会の様子。参加した教師が小グループを作り、話し合いながら同校への質問の優先順位を検討した。

図 分科会のテーマ

	テーマ	発表者・学校
分科会①	Classi及びICT活用授業例 中学校	國領教諭
	Classi活用事例(理科)	稲田教諭、森島教諭
	高校・学年活用事例&進路・キャリア活用事例	曾根教諭、栢野教諭
	Classi活用事例(数学)	中山教諭
	Classi導入実践先進校事例①	宮城県・私立東北学院中学校・高校
分科会②	中学・学年活用事例	角原教諭
	Classi及びICT活用授業例 高校	辻教諭
	Classi導入実践先進校事例②	大阪府立東百舌鳥高校
	立命館守山ICTのこれまでとこれから	國領教諭、伊藤教諭
	Classi導入実践先進校事例③	兵庫県・私立百合学院高校

使う姿が印象的でした。分科会では、本校と同じようにClassiを導入したばかりの学校の先生方と、課題や悩みを共有でき、心強く感じました」と感想を語った。

全国の先進校の取り組みを紹介する分科会では、仙台市の東北学院中学校・高校、大阪府立東百舌鳥高校、兵庫県尼崎市の百合学院高校がClassiの活用を発表。立ち見の出る分科会もあるほど盛況で、参加者の関心の高さがうかがえた。

先進校事例紹介分科会

復習用の動画をClassiで配信して理解を深める

兵庫県・私立百合学院高校

百合学院高校の内橋朋子先生うちかはしともこから、同校のICT導入の経緯と、先生が行う国語の授業が紹介された。

ICTについて自身も全くの初心者だったと語る内橋先生は、真面目だが学力の定着がいま一步の生徒の様子を見て、ICTを活用して生徒同士が学び合う授業スタイルに可能性を感じたことが、ICTを使い始めたきっかけだったと言う。校内のICT活用を進めるために、自らファシリテーションやアクティブ・ラーニングなどの講座も受講している。

先生の『羅生門』の授業では、生徒に質問づくりをさせ、グループワークで学びを深め、授業後に先生作成の解説動画を配信している。教師が初めから解説をするよりも、「学んだことが頭に残る」と生徒にも好評で、学習成果も出始めている。また、タブレットで撮影した授業中の生徒の様子を職員室で披露したところ、ICT活用によって生徒が変わることを教師が実感でき、活用したいという声が多く聞かれるようになったという。

有志の教師を中心にClassiの浸透を図る

宮城県・私立東北学院中学校・高校

東北学院中学校・高校では、創立150周年事業の一環としてICTを活用した授業改善を目指し、ノートPCの整備を進めながらClassiを導入した。

校内で活用が広まったのは、有志の教師が中心となって活用法の勉強会の開催や先進校訪問といった、草の根的な活動があった。また、学年主任が、学年・学級連絡や保健便り、学習記録など、従来はプリントで配布していたものをすべてClassiを使って配信し、毎日使うようにしたことも浸透につながったという。

今では、校内グループ機能を利用して生徒に課題や解答を配布し、授業の振り返りをClassiで提出させることで、生徒の理解度をリアルタイムに把握している。さらに、担任が朝の打ち合わせをしている間、生徒はClassiのWebテストで自習をしているというところにまで活用の幅が広がっている。それにより、生徒と教師のコミュニケーションも、今まで以上に密に図れているとのことだ。

学力向上と教師の負担減を考慮しClassiを採用

大阪府立東百舌鳥高校

大阪府立東百舌鳥高校がICTを導入した理由は、学力・進学実績の向上という学校改革目標の実現と、その実現のために教師の負担が増加することを防ぐ点にあった。家庭学習習慣の定着に向け、課外補習を増やすのではなく、生徒の幅広い学力に応じた課題を効率よく配信できることからClassiを選んだという。

生徒の所有するタブレットやスマートフォンを活用を前提にしながら、どちらも持っていない生徒には学校のパソコンを利用させることで生徒全員が使える環境を整え、保護者の理解を求めた。また、Classiの導入に際し、ほかの教材の購入を見直すことで、保護者の経済的な負担が増えないようにも配慮した。

現在は、英語の学び直し、週2回のWebテストなどでClassiを活用している。また、Classiは生徒の家庭学習用という方針を明確に打ち出し、教師には授業での活用を義務づけていなかったが、現在では授業での活用も増えてきているという。

Reader's VIEW

先生方からのご意見を
紹介します

2017年6月号・特集へのご意見

現状分析を踏まえた目標設定が重要

「学校教育目標」を抽象的な言葉で設定している学校が多いように思う。生きた教育目標にするためには、生徒や保護者、地域のニーズ、目指す教育、育てたい生徒像などを踏まえ、現状分析をしっかりとした上で、具体化・焦点化することが重要であると感じた。しかも、教師の共通理解・共通認識の上に立ち、学校組織として動けるかどうか大きなポイントであり、PDCAサイクルをしっかりと確立できるよう、評価基準や検証方法などについても押さえる必要がある。

兵庫県立相生高校 西茂樹

地域の人にも分かりやすい教育目標

本誌で指摘されていたように、各校の掲げる教育目標は、学習・特別活動などのいろいろな場面でそれが適用できる言葉で表されているが、「抽象的で分かりにくい」の

も事実である。これに対して、特集で取り上げられていた山梨県立吉田高校の「8つの力」はとても具体的で分かりやすく、教職員・生徒・保護者がベクトルを合わせることに有用であるだけでなく、地域の人たちへの情報発信としても、とても効果的なものになっていると感じた。

富山県 匿名希望

ミドルリーダーの役割が重要

管理職のリーダーシップ（時にトップダウン）と教師のボトムアップのバランスがうまく取れると、4輪駆動車のようにぐいぐいと学校改革を推進できる。そのバランス調整を果たすべきミドルリーダーの役割が大きいことを、改めて認識した。また、埼玉県立宮代高校の西浦大治郎校長の「教育には哲学が必要」という言葉に同感である。スローガンの共有（浸透、血肉化、課題の理解）も含め、自分が普段感じていることをずばっと言い当てていただき、思わず膝を打った。

滋賀県立草津東高校 堀浩司

教育 ちょこっとトーク



テーマ

夏休み明けて
気が緩んでいる生徒に
伝えたいひとこと

- 君には今、何が见えているの？ 山形県
- 今のうちに3年間分しっかり緩んでおくこと。 長野県
- やらないから終わらない、やれば終わる。 静岡県
- 「初志貫徹」「有終の美」。 兵庫県
- 人は欲で生きるものだ。 愛知県

『VIEW21』高校版 公式アカウント

LINE@

始めます！

2017年8月、スタート

『VIEW21』高校版や教育に関連する最新情報をタイムリーにお届けします。お友だちの登録方法は、下の2次元コードを読み取っていただくか、LINEアプリの「友だち追加」>「ID検索」で「@view21」とご入力いただき、追加をお願いいたします。

ぜひ、お友だち登録をお願いいたします！
アカウント名：@view21



編集後記

今号の「指導変革の軌跡」コーナーでは、鹿児島県立川内高校取材させていただきました。その取材直後の文化祭では、記事中でご紹介した「可愛山プロジェクト」の成果発表として、2年生によるディベートも行われたそうです。学年選抜メンバーと1年次のクラスマッチ優勝チームが、1年次同様の「遺伝子組み換え食品販売の是非」のテーマで熱戦を繰り広げ、結果は1年次優勝チームの勝ち。自分自身の言葉で自信を持って議論する姿が、見ていた多くの観客に感動を与えていたそうです。まさに、大人たちが期待する以上の成長を遂げている生徒の姿が、そこにあったのだと思います。（北澤）

VIEW21 高校版 2017 10 月号

次号は 10月16日発行（予定）

『VIEW21』高校版は年6回の発行です

教師を育てた 言葉たち

No. 003

東京都立北園高校 鈴木公美先生

すずき・ひろみ

◎教職歴35年。同校に赴任して7年目。
主幹教諭。3学年主任。国語科。

東京都立北園高校 全日制／普通科／共学
／1学年約320人／2017年度入試合格
実績（現役のみ）：国公立大は、埼玉大、
千葉大、東京外国語大、東京学芸大、横
浜国立大などに37人が合格。私立大は、
慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲
田大などに延べ644人が合格。



教 師にはそれぞれ自分の「よりどころ」があり
ます。私にとっては、ホームルーム活動や文
化祭などの特別活動がそれにあたります。しかし、
かつて、中退者が多く、指導上の対応が困難な学校
に勤務した時は、生徒指導に手いっぱいと思うよう
に特別活動に取り組むことができず、行き詰まってい
ました。確かなよりどころを手に入れたと考えた
私は、40歳の時、東京都教員研究生に応募し、大
学で1年間、臨床心理学者の1教授の下、「居心地の
よいホームルーム」を主題に研究に取り組みました。

カウンセリングに関する学会にいくつも参加し、
勤務校の生徒にヒアリングやアンケート調査、検証
授業を行いました。どうすれば居心地のよいホーム
ルームができて、生徒が中退せずに済むのか、何か
月も考えましたが、研究の見通しはなかなか立ちま
せませんでした。悩む私に1教授がおっしゃった一言が
「柔軟さをヒントに考えてみなさい」でした。

教 授の言葉の意味はすぐには分かりませんでした。
しかし、研究を進めるうちに、ホームルー
ムで「常に中心的存在」「いつも控えめ」など、最近
の言葉で言う「キャラ」が固定していると、生徒は
居心地の悪さを感じるのだと分かってきました。リー
ダーシップのある生徒も時にはぼんやりしたいし、
おとなしい生徒もたまには自分の言葉がみんなに受
け入れられ、ホームルームが動くような体験をした
いのです。ホームルームでの個々の生徒の役割が「柔
軟」に変われることが、居心地のよさの要素として
浮かび上がってきました。

そして、柔軟さは私たち教師にも大切なことだと
気づきました。以前の私は、「学校は公平な場でなけ
ればならない。指導においては、厳しくあるべき」
と考えていました。しかし現実には、同じ遅刻をし
た生徒でも、恵まれた生活環境の中で遅刻する者も
いれば、保護者に代わって弟や妹の世話をしている
遅刻する者もいます。もちろん、遅刻に関しては理
由によって「これはよい」「これは駄目」と指導に差
をつけるわけにはいきません。でも、公平性ばかり
を追求し、一辺倒に厳しく指導することが生徒にとっ
て本当に公平なことなのか、ずっと考えていました。

ここに、「柔軟」という言葉をあてはめると、生徒
へのアプローチが変わることに気づきました。家庭
の事情で遅刻する生徒には「頑張っていることは分
かっているよ。でも遅刻は駄目だよ」と声をかけ、
一見恵まれた家庭環境の生徒も実は他人には言えな
い悩みを抱えているのかもしれないと、自分の思い
込みを取り払って接する。目に映る姿だけにとらわ
れず、見えない部分を想像して生徒を理解しようと
することで、生徒にける言葉が変わるのです。「柔
軟」という言葉に出合ったことで、私が抱えている
課題のほとんどが解決できた気がしました。

今 でも、自分が行き詰まっていると感じた時は、
この言葉を噛み締めながら、生徒に対する思
い込みはないか、自問自答します。ホームルームは
偶然の産物です。生徒も教師もお互いを選べないか
らこそ、柔軟で、居心地のよいホームルームを目指
したいと思うのです。

英語4技能検定 GTEC



- 「聞く・話す・読む・書く」の4技能をスコア型の絶対評価で測定
- 学習指導要領に準拠した出題内容
- 校内で一斉実施ができる「スピーキングテスト」
- 受検者全員が4技能のスコアを取得することが可能
- 学校での指導改善に活用できる充実したフィードバック

学校とともに、日本の英語教育を改革し続けて20年。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume3 2017年8月号
2017年8月21日発行/通巻第365号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
VIEW21編集部 〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階
©Benesse Corporation 2017

お客様
サービスセンター

【フリーダイヤル】 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00/土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)
株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17